特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1990

福井県立朝倉氏遺跡資料館

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 1990 正誤表

訂正箇所	誤	正	訂正箇所	誤	正
序　1行目	発堀	発掘	15P 21行目	小量	少量
序　8行目	基ずいた	基づいた	15P 29行目	越前焼き	越前焼
例言 4行目	第69次調査	第70次調査	15P 29行目	固体数	個体数
例言 5行目	館前の整備	館前の整備 諏訪館園路の造成	17P 8行目	25・26内面が	25・26は内面が
1P 4行目	12月25日まであった。	12月25日まででであった。	18P 3行目	グループI	グループ①
1P 8行目	12ヶ所	14ヶ所	18P 〃	同一固体	同一個体
1P 9行目	510㎡	775㎡	18P 7行目	固体数	個体数
1P 15行目	69次	70次	18P 13行目	グループI	グループ①
1P 17行目	細田強	細田憲一	18P 〃	同一固体	同一個体
1P 第1表 2行目	発堀	発掘	19P 11行目	その輪トチン	輪トチン
1P 第1表 3行目	510㎡	775㎡	19P 12行目	97は	85は
1P 第1表 3行目	第70次	第69次	19P 15行目	大き部類	大きい部類
1P 第1表 4行目	第69次	第70次	19P 17行目 18行目	交址	交趾
1P 第1表 6行目	設備	設置	20P 9行目	115～116	115～116(ゴシック体)
4P 1行目	3200㎡	3800㎡	20P 9行目	94～96までの記述は、グループ①の記述です。	
7P 3行目	SX3686	SX3868	20P 29行目	SD2226	SD2261
7P 7行目	B地区	Q地区	22P 8行目	外面は	外面と
7P 12行目	1尺3寸廂	1尺3寸の廂	22P 10行目	漆器碗	漆器椀
7P 12行目	横色土	黄色土	23P 27行目	考えらる	考えられる
9P 16行目	SK3852～56	SK3852～55	24P 3行目	『越藩拾遺録』下	『越藩拾遺録』(下)
9P 17行目	5基	4基	24P 17行目	引化	弘化
10P 9行目	土SX3859～	土壙SK3859～	24P 20行目	(マー)	(ママ)
10P 13行目	SD3888	SD3848	26P 21行目	第14図	第15図
10P 第6図	青灰色腐色土	青灰色腐植土	26P 25行目	青磁11	青磁11(ゴシック体)
13P 26行目	SB3848	SB3840	26P 第3表	合計11,44	合計11,443
14P 6行目	周辺からから	周辺から	27P 4行目	第15図	第16図
14P 表2	洞釜	(洞釜) 削除	30P 26行目	第17図	第18図
14P 表2	丸釘	(丸釘) 削除	30P 31行目	壬戌	壬戌
14P 表2	漆碗	漆椀	32P 30行目	植裁	植栽
15P 9行目	延ばれ	延ばされ	39P 1行目	諏訪館園路整備工	諏訪館園路造成工

▲漆ＳＤ2261　出土
漆器椀

◀第68次調査地区
全景

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1990

福井県立朝倉氏遺跡資料館

序

朝倉氏遺跡の発掘調査・環境整備事業もお蔭様で順調に進捗しており、これまで発掘整備された面積は約9ヘクタールになります。城戸内の館や武家屋敷、寺院、町屋跡、城戸などが発掘調査されていますが、本年度は城主の館につぐ規模の朝倉景鏡の館跡を調査地に選びました。景鏡は朝倉氏一族・同名衆の上位にあり、良好な遺構と遺物の埋蔵が予想されましたが、残念ながら後世の河川の氾濫をうけ大部分は流失していました。それでも濠や土塁を具備した立派な屋敷であったことが判明しました。また濠からは多数の漆器椀が出土し、日常生活の豊さがしのばれます。なお景鏡については、文献資料に基ずいた調査研究の報告もあわせて掲載しています。

発掘調査は，他に現状変更申請にともなうものがいくつかありましたが、いずれも遺構の残存状況が悪く特筆すべきものはありません。

環境整備は前年度発掘調査した南陽寺跡を埋め戻し、仏殿や門跡を礫混りソイルセメント舗装で表示、周囲には芝生を植栽するなどして整備しました。また説明板を設置し、南陽寺の由緒も分るようにしています。

館前の仮駐車場を撤去し、芝生広場を拡大造成しました。景観上もまた大人数の休養慰楽やイベント広場として大いに貢献することでしょう。これで館周辺の整備は、ほぼ完了したことになります。上城戸よりに仮駐車場が設けられ、休憩所も福井市が事業主体で建設されましたが、この駐車場から諏訪館跡庭園に容易に上がれるように、ソイルセメントの園路を造成しました。遺跡を廻遊する上で、かなり便利になったのではないでしょうか。

本年度も事業の執行にあたり、文化庁はじめ関係各位の皆様、地元の皆様には大変お世話になりました。心から厚くお礼申し上げる次第です。

平成3年3月

福井県立朝倉氏遺跡資料館
館長　藤原武二

例　　言

一　本書は福井県立朝倉氏遺跡資料館が、平成２年度に実施した国庫補助事業による発掘調査及び環境整備の概要報告である。

一　本書に収録した調査は、第５次５か年計画の４年目にあたる第68次調査、現状変更申請（家屋新築）に伴う第69次調査、第71次調査の３件である。

環境整備は、南陽寺跡（第64・65次調査）館前の整備である。

一　遺構平面図作成にあたっては、国土座標系第Ⅵ系を基に朝倉氏遺跡内に設置した基準点によった。第68次調査については、ヘリコプターによる写真測量を実施した。

一　本書の作成にあたっては、館長藤原武二の指導のもとに館員全員が討議・検討を行い岩田隆が編集を担当した。執筆分担については、文末に文責を記した。

目　　次

巻首図版

序文

例言

Ⅰ　平成２年度の調査概要 …… 1

Ⅱ　第68次調査 …… 4

　　遺構 …… 5

　　遺物 …… 14

　　朝倉景鏡について …… 24

Ⅲ　第70次調査 …… 26

Ⅳ　第71次調査 …… 28

Ⅴ　環境整備　南陽寺跡整備工 …… 32

　　朝倉館外郭修景工 …… 36

　　諏訪館園路造成工 …… 39

Ⅰ　平成２年度の調査概要

本年度は「環境整備第５次５ヶ年計画」に基づく第４年目の調査として、城戸内町中惣の地係約3800㎡について発掘調査を実施した。この調査地区は、昭和57年に実施した県道鯖江・美山線改良工事に伴う第43次発掘調査地区のうちＱ・Ｐ地区の東に隣接する。調査期間は平成２年４月１日から12月25日まであった。11月７日に写真測量のためにヘリコプターによる空中撮影を行なった。11月14・15日には遺構の写真撮影を実施した。また、12月１日には本調査地区についての現地説明会を行った。

一乗谷川の河川改修計画の予備調査として、夏の渇水期に一乗谷川の旧河川敷確認のためのトレンチ調査を行った。上城戸の外から下城戸の外まで12ヶ所にトレンチを入れ、その合計面積は510㎡である。

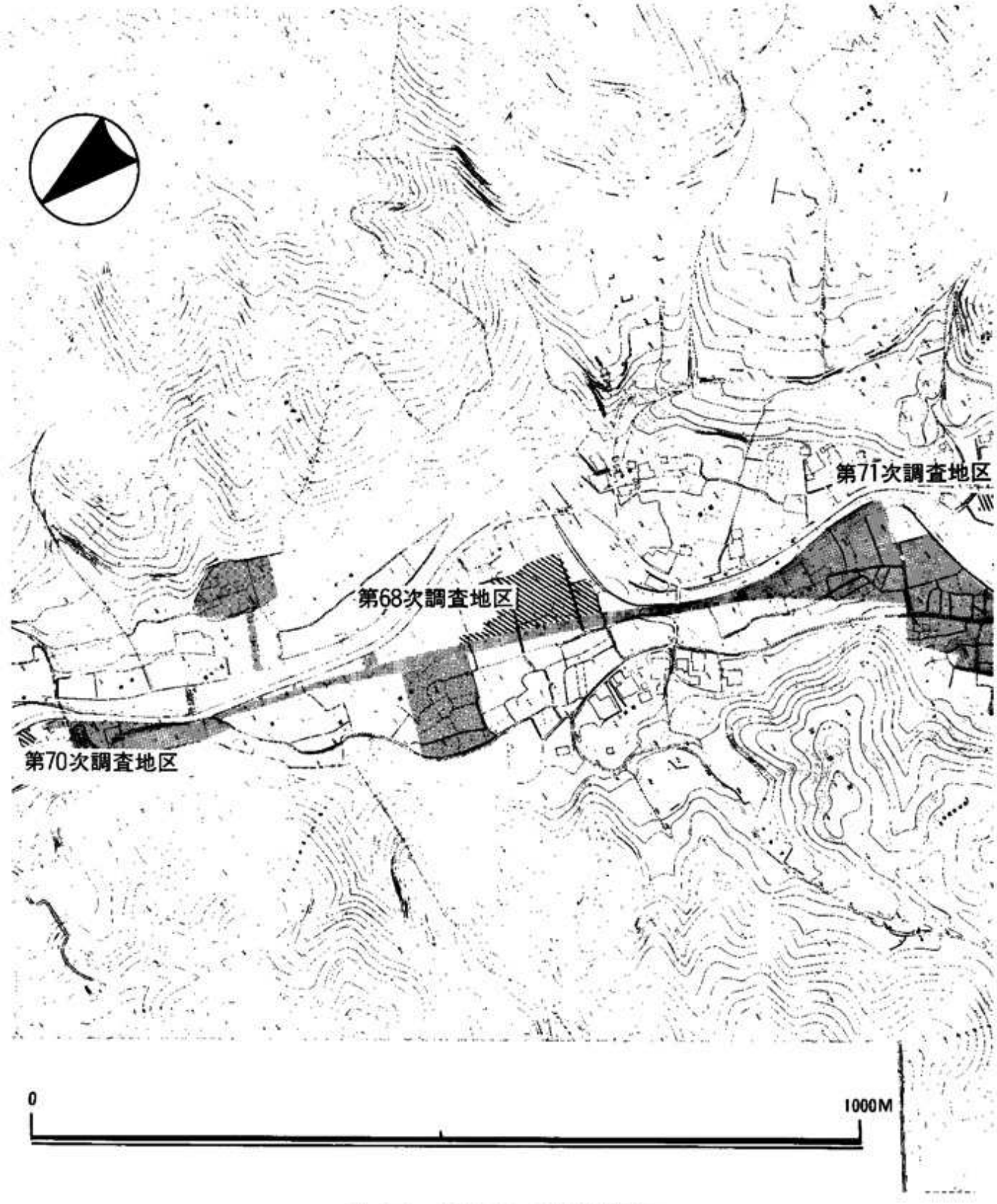
現状変更申請に伴う調査としては、６月６日から14日まで、吉川和男宅改築工事（安波賀町字土居本）の事前調査を実施した。面積は約100㎡で、調査次数を69次調査とした。この調査地区は下城戸の北隣に位置し下城戸の外濠に隣接している。また11月９日から12月19日まで細田強宅改築工事（城戸内町字庄角14－2）の事前調査を実施した。面積は約300㎡で、調査次数を71次調査とした。

特別史跡指定地内の現状変更申請件数は、平成３年３月１日現在で30件に上る。昭和60年以降、件数としては漸増の傾向にあるが内容的には例年と大差ない。主な変更事由としては、老朽化した家屋の増改築、車庫、農作業小屋の新築・移転、浄化槽・配水管の埋設、電柱の移転等がある。そのほか城戸ノ内・安波賀地区の祭事・催し物に関するものや、史跡管理に伴う看板・標識の設置、修復等がある。自然災害復旧に伴う河川改修や治山工事によるものもある。この中で近年増えてきたのは、浄化槽設置に伴うもので今後も増えて行くと予想される。

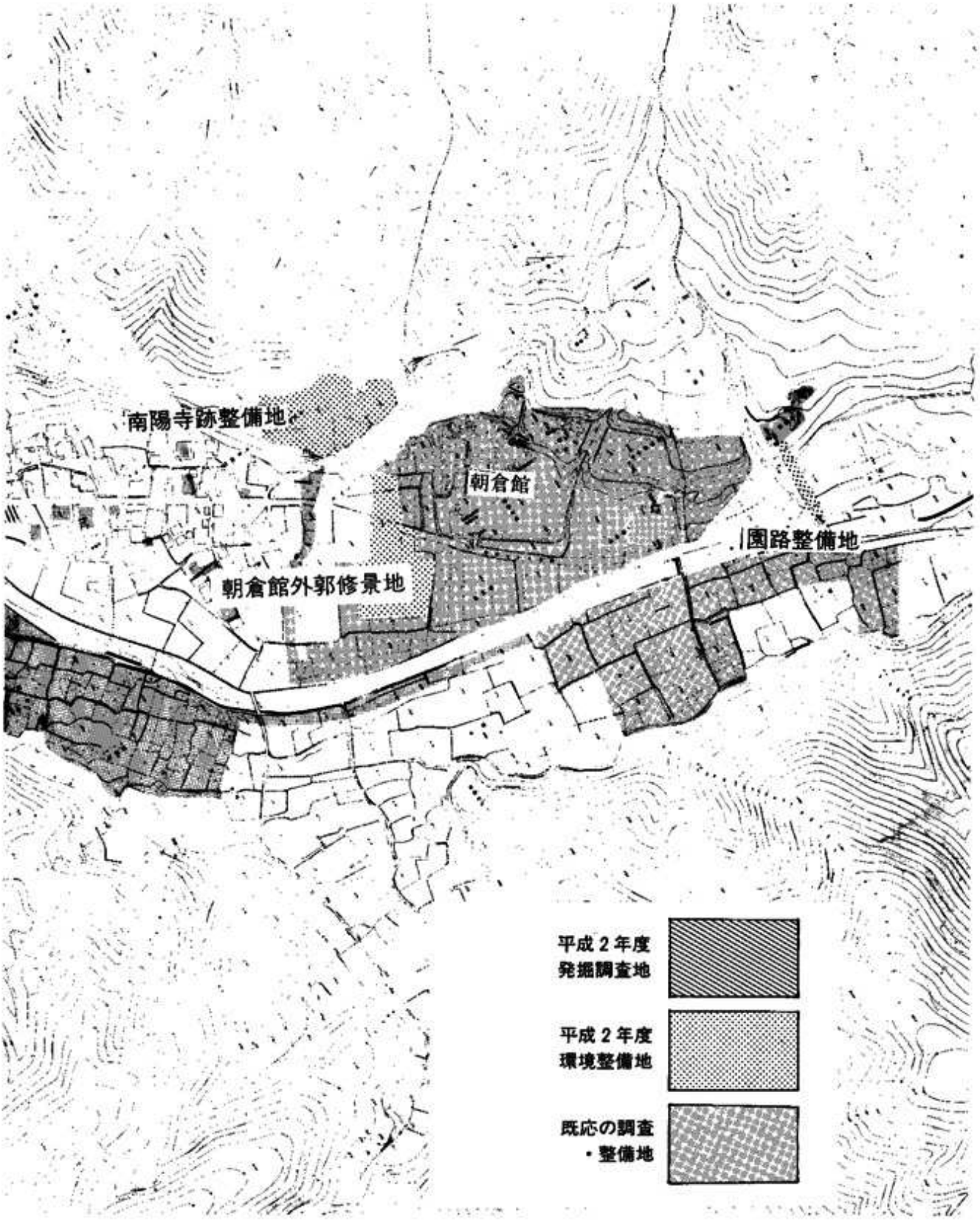
以下に発掘調査を実施した事項について表記する。

変更事由	変　更　箇　所	面積	調査期間	調査次数
発掘・整備	城戸ノ内町６字中惣	3,800㎡	４月１日～12月25日	第68次
旧河川敷の確認	城戸ノ内町河川敷付近	510㎡	６月１日～３月30日	第70次
住宅新築	安波賀町14十居ノ本11－１	100㎡	６月６日～14日	第69次
住宅新築	城戸ノ内町14字庄角２－１，２	300㎡	11月９日～12月19日	第71次
浄化槽設備	城戸ノ内町20－13	６㎡	12月７日～11日	

第１表　　平成２年度発掘調査一覧



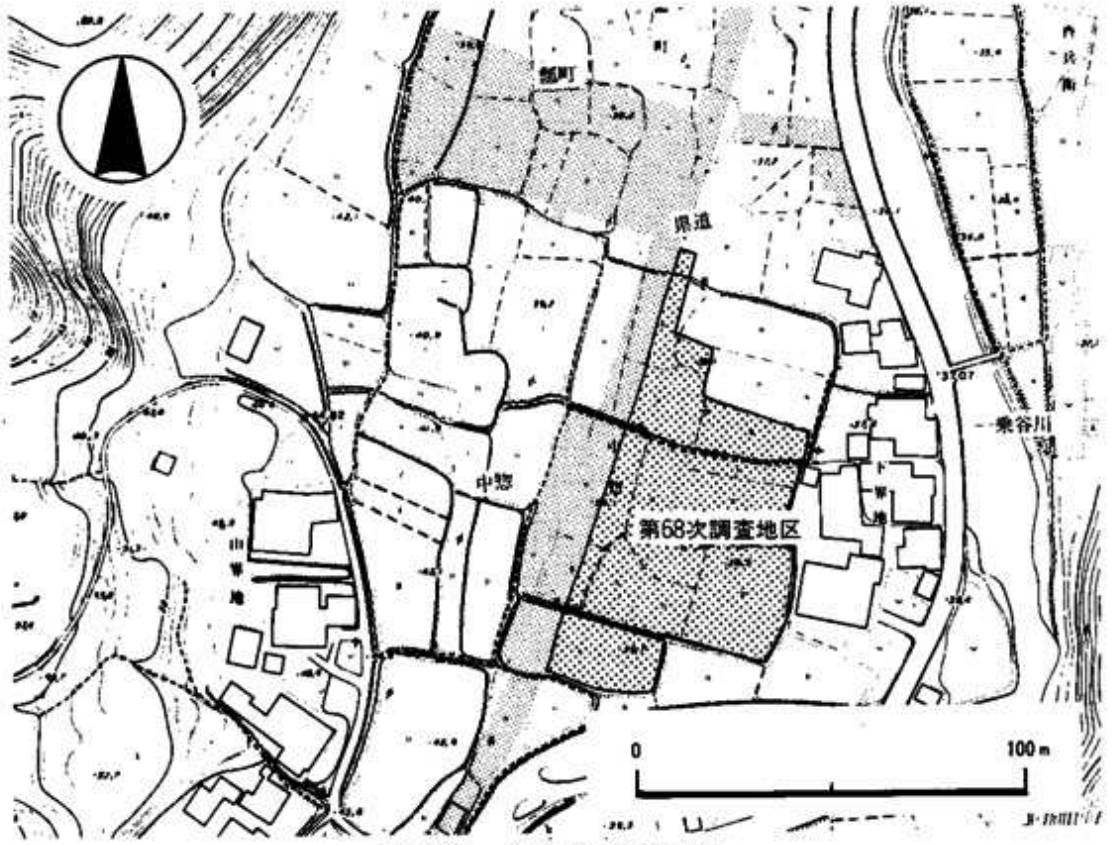
第1図　発掘調査・環境整備位置図


南陽寺跡整備地
朝倉館
園路整備地
朝倉館外郭修景地
平成２年度
発掘調査地
平成２年度
環境整備地
既応の調査
・整備地

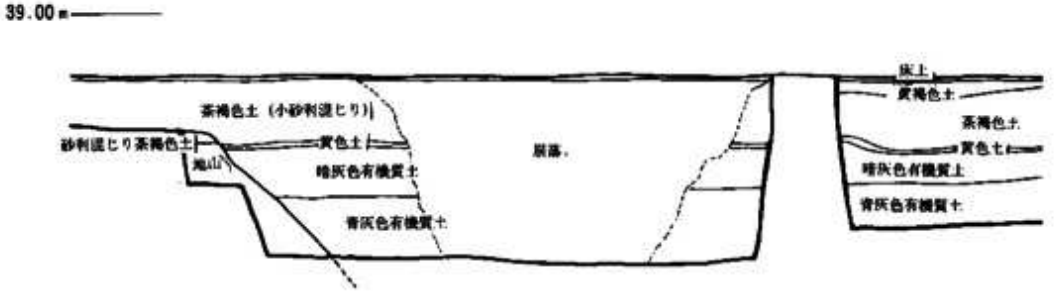
Ⅱ　第68次調査

本調査は城戸内町字中惣の約3200㎡について実施した。この調査地区は下城戸から320m入ったところにあり、地籍図の畦から90m×60mの区画が看取できる。また春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」では朝倉式部大輔館跡と書かれているところに比定できる。さらに、68次調査地区の西隣は昭和57年に、県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査を実施している。そこでは幅12mの線上の調査ではあったが、南と北の端で濠が見つかり、濠で囲まれた規模の大きい屋敷跡であることを確認している。

調査の目的は、一乗谷においては朝倉館以外では濠を有する数少ない大規模武家屋敷の



第２図　　第68次調査位置図



第３図　　ＳＤ2255濠土層断面図

全容を明らかにすることにあったが、調査地区の東半分以上が一乗谷川の氾濫によってすっかり削りとられており、所期の目的を達成することはできなった。

平成２年４月１日に調査を開始し、途中現状変更申請に伴う緊急調査を挟んで、遺構の全容が判明した11月７日に写真測量のためのヘリコプターによる写真撮影を行ない、14・15日の両日遺構の写真撮影を行なった。土層図を作成した後、遺構保護のための仮の埋め戻しをして、12月25日に現場作業を終了した。

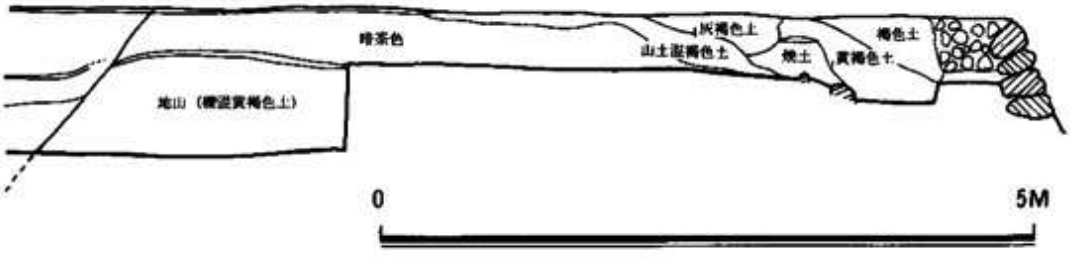
遺　　構（ＰＬ．１）

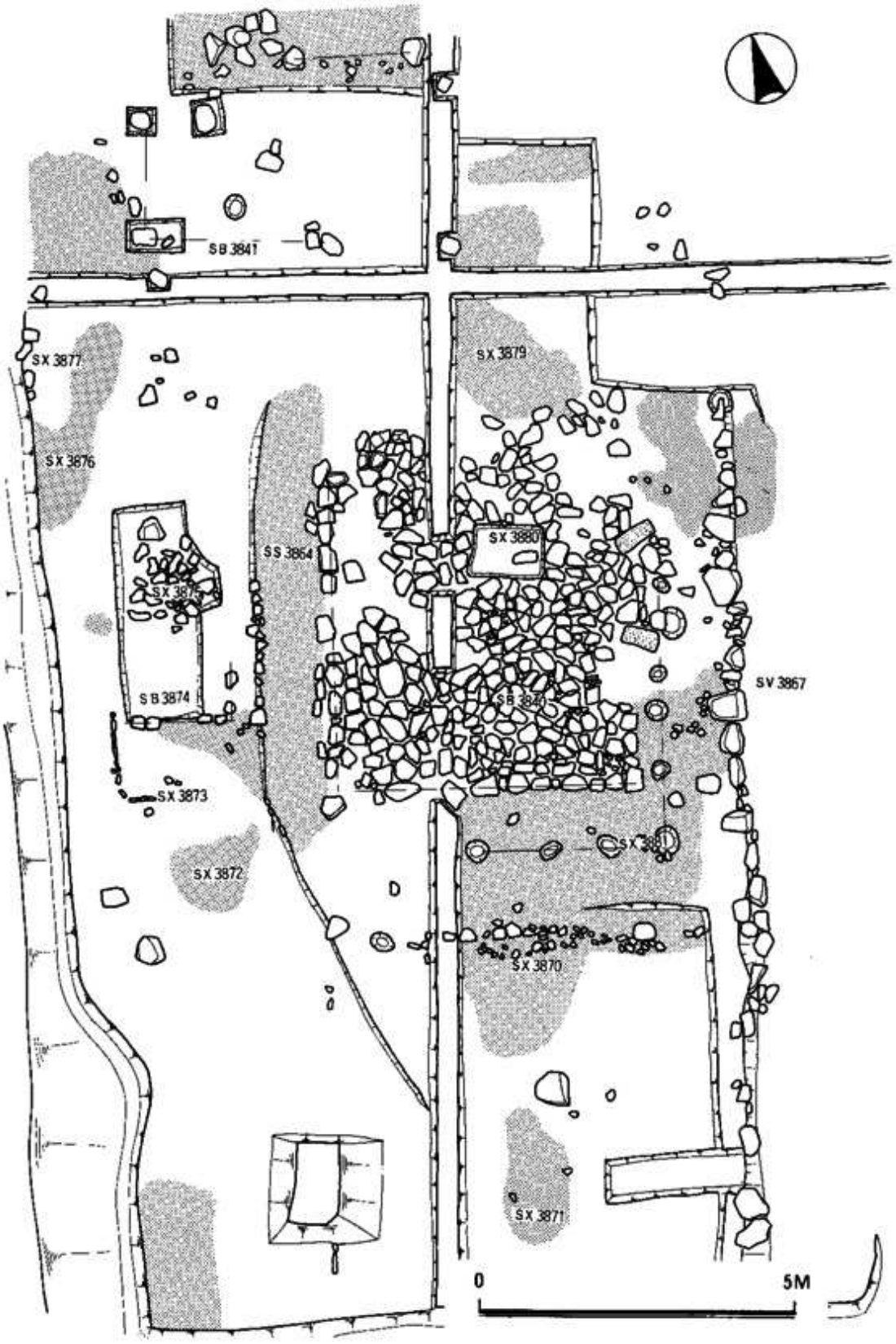
発掘された遺構は、礎石建物５・濠２・石組溝３・石敷通路３・土塁２などである。遺構が残っていたのは、調査地区の西端の幅約15m長さ約70m分で、調査地区の東半分以上が一乗谷川の水害によって削り取られていたので、調査面積の割りには発掘された遺構が少なかった。調査地区全体がひとつの屋敷跡と考えられるが、遺構の性格から３地区に分けて報告する。南から濠ＳＤ2255のある一段高い地区をＳ地区、土塁ＳＡ3845の北端までをＱ地区、石敷遺構3899以北をＰ地区と呼ぶ。層序についてはＱ地区は２～３層の土層がみられるが一部以外は非常に薄く、Ｐ地区は石敷とその上位の面の２層が確認できた。なお、調査地区の西隣は先述したように、昭和57年に調査されており同一屋敷内と考えられるので、必要に応じて報告していく。

Ｓ地区

ＳＤ2255　第43次調査で見つかった濠の続きである。調査期間の関係から濠全体を発掘することができず濠を横断する幅1.5mのトレンチを入れるに止まった。そのため不明な点がおおい。幅は７ｍを測るが、深さについては現地表から1.4m掘ったところでトレンチの壁が崩壊し、底まで掘れなかったため不明である。その深さでは後世の埋土ばかりで、遺物も近世の陶磁器が数点出土しただけである。その下層は有機質青灰色土となっていた。

ＳＡ3900　濠ＳＤ2255に対応する土塁で、幅7.5mを測る。発掘調査前はすっかり削平されてその存在がわからなかった。表土を除去した段階で黒褐色の土が幅３ｍ、長さ20mにわ





第４図　第68次調査遺構（１）

たって東西方向に延びていた。この時は土塁とは気が付かず、濠ＳＤ2255を探すため南北方向にトレンチを入れ、その断面を観察した結果幅7.5mの土塁であることがわかった。土塁の断面は、黄褐色土の地山の上に拳大の砂利を敷き（ＳＸ3686)、その上に黒褐色土を盛り上げている。現在残っている土塁の高さは地山から約80cmである。なお、第43次調査のときも地山まで削平されていたため、土塁は存在しなかったと推定していた。

Ｑ地区　（ＰＬ．２～６）

ＳＢ3840　Ｂ地区南端近くに位置する、石敷の礎石建物である。石敷全体が薄い焼土で覆われており、東寄りほど焼土が厚くなっていた。石敷の範囲は東西５ｍ×南北６ｍで、人頭大の扁平な川原石が敷詰められている。石敷の周囲の石は半間おきに礎石と推定されるしっかりした石が据えられているところから石敷の範囲が建物と考えられ、さらに石敷の南と東に並ぶ浅いピット状の遺構が、礎石の抜き取り穴と考えられるところから南と東に半間と１尺３寸廂がついていたと考えられる。この廂の部分は粘土質の横色土で覆われていた。また石敷の東に面して「ハ」字状に笏谷石が敷かれており、入口かとも推定された。この石敷建物の性格については、朝倉館の石敷建物や第25次調査地区の石敷建物とよく似ているところから倉庫と推定した。

石敷の中央に１ｍ×0.7mの石敷のない部分があり、中は魚の骨の混じった灰が詰まっていた。その深さは25cmであった（ＳＸ3880)。しかし、この遺構は中の灰が石敷の下に潜っていることから、石敷建物より一時期古い遺構と推定された。

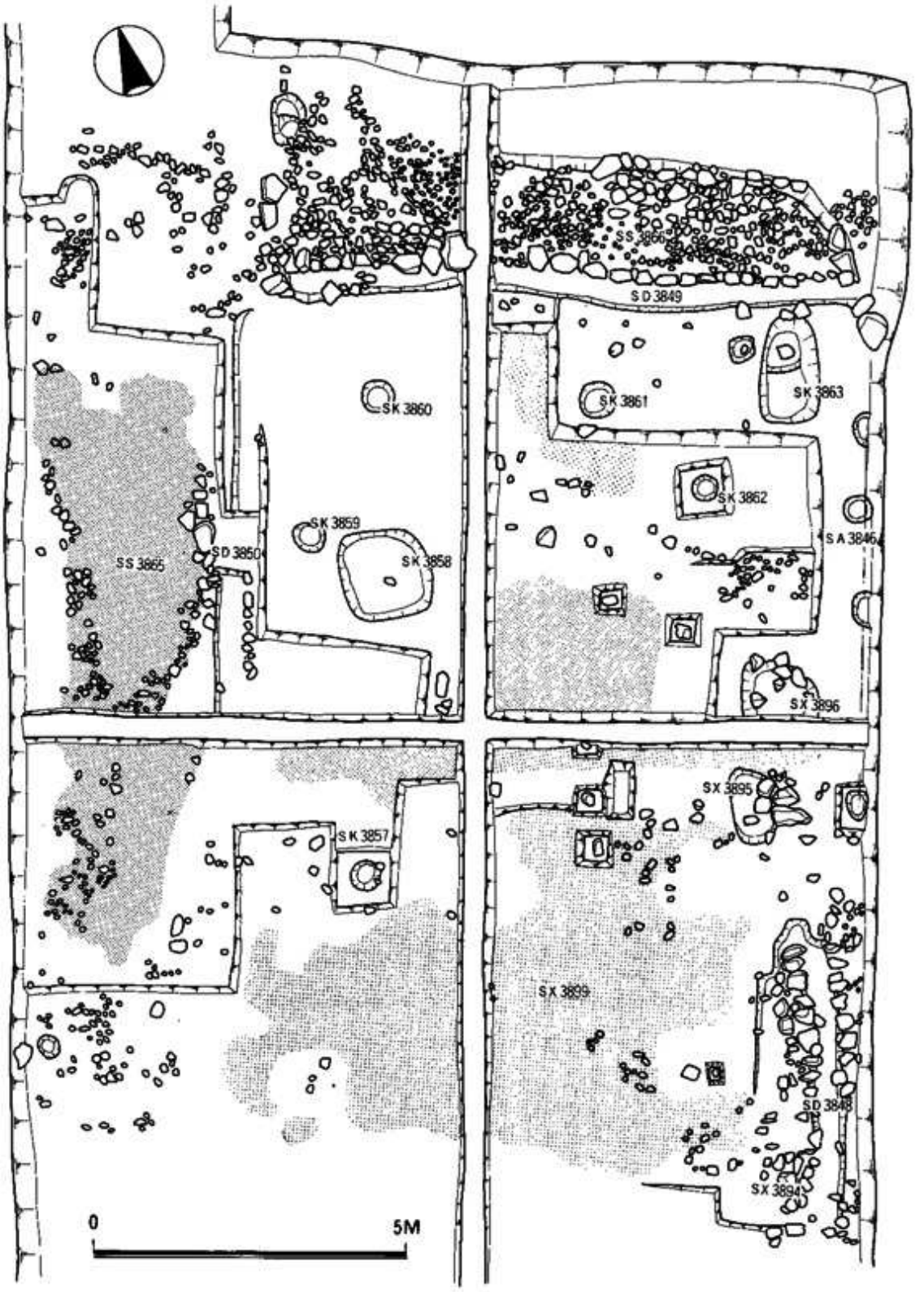
ＳＸ3870　石敷建物ＳＢ3840の南に位置する石列である。南側に面があり、石敷建物と関連する塀と推定される。この塀と石敷建物との間は小砂利（ＳＸ3881）が敷詰められていた。

ＳＶ3867　石敷建物ＳＢ3840の東に位置する石の段である。段差は約30cmある。やや大きめの石１段だけで構成されている。上面はきれいに面が揃っていた。段の下は石敷建物を覆っていた焼け土と同じ焼け土と転落した石で埋まっていた。この石段ＳＶ3867と石敷建物ＳＢ3840との間は小砂利が敷詰められており、この小砂利敷はＳＸ3881と続く。

ＳＳ3864　石敷建物ＳＢ3840の西に隣接する通路である。幅は90cmで、13m分検出した。両側は石で区画され、周囲より少し高くなっている。内側は砂利敷である。

ＳＢ3874　通路ＳＳ3864の西に隣接する礎石建物である。礎石は６石残っているだけなので規模は不明であるが、礎石が大きくないことから小規模の建物と推定される。

ＳＸ3873　礎石建物ＳＢ3874の南に位置するＬ字状の石列である。扁平な石を立てた状態で並んでいる。遺構の方位が周辺の遺構群とは異なっているところから下層に属する遺構であろう。



第５図　第68次調査遺構（２）

ＳＢ3841　石敷建物ＳＢ3840の北西に位置する礎石建物である。礎石と考えられる石が同一レベルに６石並ぶが、柱間寸法や方向が合わない。規模や性格については全く不明である。なお、付近に散在する石群は畦畔に使われていたものである。

ＳＢ3842　礎石建物ＳＢ3841の下層に位置する礎石建物である。３石しかなく規模や性格については全く不明である。

ＳＢ3843　発掘区中央の西端に位置する礎石建物である。西端に位置するため６石の礎石が一列に5.65m分並ぶだけである。礎石のレベルが南ほど高く、南端の礎石のレベルと北端の礎石のそれとは約10cmの差がある。この礎石建物の周辺は砂利敷（ＳＸ3887）になっていたらしい。

ＳＡ3845　発掘区中央の東端に位置する障壁跡である。幅は3.5mあり、長さ15mにわたって残存していた。高さについては最下層の１石分40cmだけで、その１石も残ってないところが多い。障壁内部はガラ石と山土が詰まっていた。北側へは延びていかず、南側についてもその痕跡が全く認められなかったことから、障壁がこれ以上続いていた可能性が少ない。幅が広すぎるきらいもあるが屋敷内の障壁であろう。障壁の北端近くに礎石らしい石が２石あるところから、ある時期に障壁が取り壊されていた可能性も考えられる。

ＳＫ3852～56　発掘区中央に位置する土壙群である。下層遺構群に属する。直径が１ｍ～1.5m、深さが10cm～20cmの皿状の土壙が５基ほぼ直線状に並んでいた。内部は黒褐色の土の中に大量の土師質皿が投棄された状態で埋まっていた。

ＳＸ3885　土壙群の南に位置する石敷遺構である。70cm×140cmの長方形に扁平な拳大の割り石を敷詰め、石敷の上面は平らに揃っている。近くに溝もなく性格は不明である。

ＳＤ3847　発掘区中央部西端近くに位置する石組溝である。かなり破壊されていて６ｍ分しか残存していない。この付近には集石遺構（ＳＸ3889～93）が存在するが、はっきりした遺構を形成せずその性格は不明である。

Ｐ地区　（ＰＬ．６～９）

Ｐ地区の土層については、耕土・床土の下は薄く全体に黄色土が広がり、砂利敷通路ＳＳ3865・66を覆っている。この段階ではＳＸ3896やＳＳ3865の高い石を除いては遺構は認められなかった。黄色土の下は炭混じり茶褐色土があり、この上面と同じ面に砂利敷通路ＳＳ3865・66やいくつかのピットや柵列ＳＡ3846が見つかった。炭混じり茶褐色土の下は丁寧に敷詰められた砂利面があり、砂利面の所々に薄い炭層がある。砂利面は南から北に向かって傾斜しており、部分的に２～３層重なっている。

ＳＳ3865・66　発掘区北端に位置する砂利敷通路である。南北方向のＳＳ3865は、発掘区の西端にあるため通路の幅はわからない。また南側の行き先についてもはっきりしない。

使用されている砂利は割合細かいが、部分的に拳大の石も混じる。東側に側溝ＳＤ3850がつく。東西方向の砂利敷通路ＳＳ3866は幅が1.8mあり、発掘された長さはＳＤ3850までとすると9.5mである。また北側にも折れ曲がっていたようである。砂利敷はやや大きい砂利が使用されており、南側には側溝ＳＤ3849がつく。北側の側石はちょうど田の畦になっていたので乱れている。

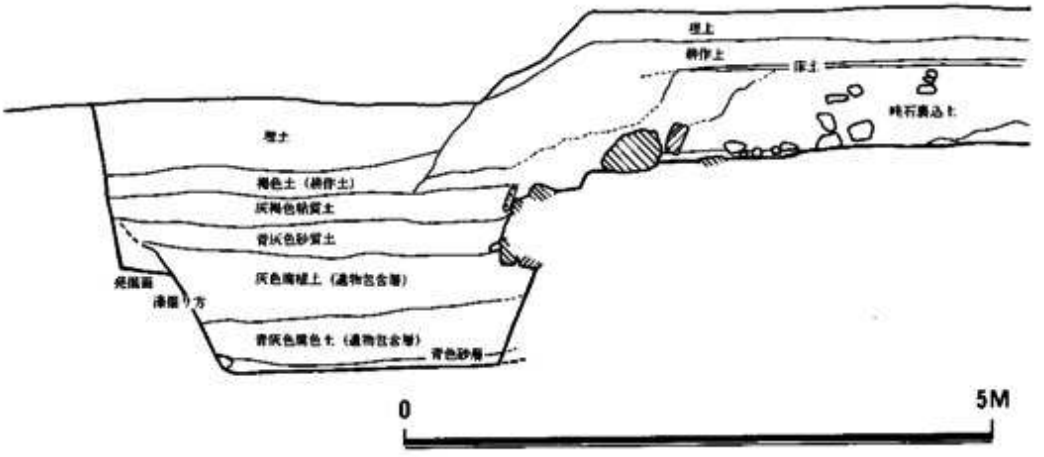
ＳＤ3849　石敷通路ＳＳ3866の側溝で、幅は20cm、長さは９ｍある。南側の溝石のほとんど抜かれ、溝は焼土で埋まっていた。石敷通路ＳＳ3865の側溝ＳＤ3850とは本来つながっていたと推定されるが、攪乱を受けていたため直接はつながらなかった。なお、これらの溝で区画された空間には、側溝内の焼土や土ＳＸ3859～62が礎石の抜取り跡と考えられるところから建物が存在したと推定される。

ＳＡ3846　発掘区北東隅に位置するピット群である。ほぼ直径30cm、深さ10cm前後のピット４基が直線状に並ぶ。中はいずれも炭混じり土で埋まっていた。

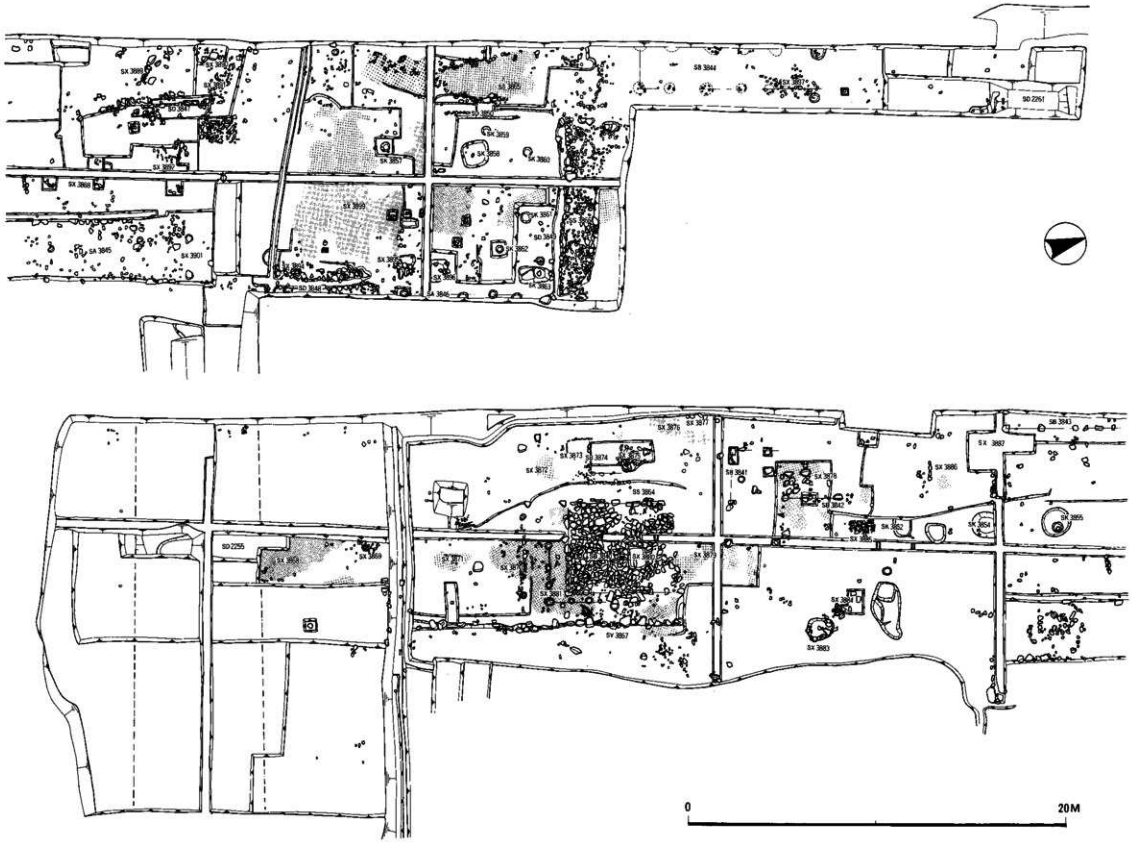
ＳＤ3888　Ｐ区の東南隅に位置する南北方向の石組遺構である。幅は30cmで、長さは溝の両端が攪乱を受けているので不明だが、4.5m分検出した。この溝全体が黒い炭混じり土で覆われ、溝内も同じ土で埋められていた。

ＳＸ3899　Ｐ地区の下層のほぼ全面に広がる砂利敷である。南から北に向かって傾斜しており、部分的には２～３枚の重なりがある。砂利敷は非常に丁寧で、表面はほとんど凹凸がないほどである。この砂利敷はＳＳ3866の下を通って北側にも広がっている。

ＳＢ3844　Ｐ区から北に延長したトレンチ内に位置する礎石建物である。礎石は失われているが、拳大の根石群の存在から礎石建物とした。トレンチ内なので規模は不明だが、６基×２列、計12基の根石群を検出した。北は濠ＳＤ2261、南は通路ＳＳ3865が存在するの



第６図　濠ＳＤ2261土層断面図



第７図　第68次調査全測図

で南北方向は6基分9.6mの規模で西側に延びていたと推定される。柱間寸法は根石なので不正確ではあるが、南北方向のそれは1.8m、東西方向のそれは2mと推定される。

SA3902　濠SD2261に対応する土塁である。トレンチの東壁は攪乱を受けていてわからなかったが、西壁で確認することができた。幅は基底部で約8mを測る。版築のような積み方はしていない。

SD2261　発掘区北端に位置する東西方向の濠である。第43次調査で発掘されていた。濠の南側の肩がはっきりと確認できなかったが、幅は5m程度と推定され、深さは濠の北側の道路面から1.7mを測る。濠内の堆積土は上から灰色粘質土、灰色砂質土、青灰色腐植土（2層）、青色砂層からなり、青灰色腐植土下層からは多数の漆器を含む木製品が出土した。

以上発掘された主要な遺構について説明を加えたが、第43次調査の結果もふまえてこの屋敷のまとめをする。

まず第1点は、第43次調査では濠を検出していたが、今回の調査で濠に土塁が伴うことを確認した。第43次調査では土塁の基底部まで削平され、特に南側の土塁は地山まで削平されていたために土塁を見つけることができなかったが、今回は僅かではあるが土塁の基底部がのこっていたために検出することができた。濠に土塁が伴うことは当然とはいえ、第43次調査では土塁が確認できなかったので、道福谷からの水路の可能性も考えらるとしていた。

この「館」の規模ついては、南北方向が濠の内側で96mを測る。東西方向については、発掘区の東$\frac{2}{3}$の遺構がすっかり削平されていたこと、西側の濠を確認していないことから全く不明であるが、南北方向が現在の畦畔を反映していることから、東西方向もある程度反映しているとすると約60mになる。

これまで10ヶ所近くの家臣団の屋敷跡を調査してきたが、その多くの内部が削平されていたこともあって意外と建物の配置等がはっきりしない。唯一第15・25次調査結果から復元した武家屋敷があるだけである。今回も建物の配置やその構成がはっきりしないが、SB3848が敷石の建物で倉庫と推定できることや、断片的ではあるが第43次調査で検出された建物跡も含めてこの屋敷規模にふさわしい主屋となるような建物跡は検出されていないことから、この西側に当たる部分は台所や倉庫、物置など裏方に当たる建物群が建っていたところであろう。

遺　　物

第68次調査で出土した遺物の総点数は32,762点とこれまでの調査の出土遺物点数と比較して少ないが、発掘区全体の$\frac{2}{3}$が一乗谷川の氾濫によって遺構が全く失われていたためで、遺構が存在していた面積当りの出土遺物点数は21.13点／㎡とあまり遜色がない。しかし、その内訳は土師質皿が95.4%を占め、その他の遺物は越前焼が1.6%と１%を超えるだけでその他は１%に満たない。土師質皿が多かったのは、発掘区の中央付近に４基の土壙があり中は大量の土師質皿を投棄してあったためである。この土壙やその周辺からから出土した土師質皿が出土遺物全体の半分以上を占める。

遺物の整理方法は、基本的にはこれまでの方法を踏襲して発掘区が大きくは３段の水田面から構成されているのでそれによって地区割りをし、層位的には建物や溝などを基準とする遺構面毎に遺物群を編成してそれを提示することとした。しかし、今回はＱ地区の遺構面の重なりが薄く層位的な分離が十分できなかったため、耕作土と床土を除去し第１回の遺構面を検出した段階で出土した遺物群をグループ①とし、第２回目の遺構面検出作業で出土した遺物群をグループ②とした。したがってグループ②はいくつかの遺構面の重なりがあり、厳密な意味での層位的な分離ではない。Ｐ地区については石敷遺構面とそれを覆う灰褐色土層からの出土した遺物群をグループ②、それより上位の黄褐色土とその面から出土した遺物群をグループ①とした。前後するが、Ｓ地区については削平が著しく発掘段階で混乱したため今回は一括し、濠からの遺物だけを分離した。

表２　第68次遺物一覧表

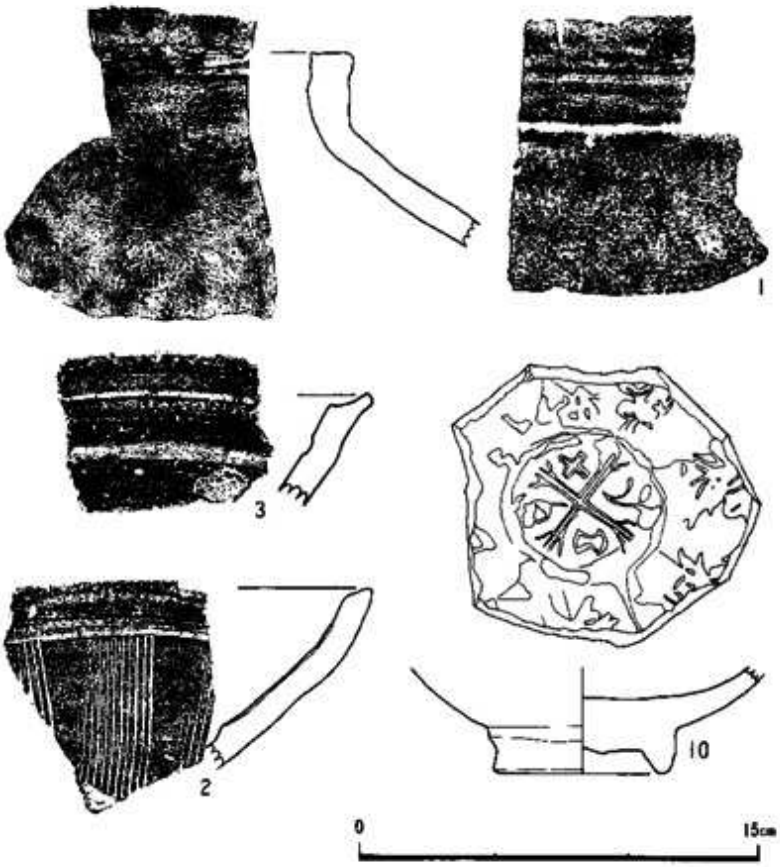
器種			点数	%
日本製陶磁器	越前焼	甕	356	1.08
		壺	44	0.13
		鉢	38	0.11
		擂鉢	88	0.3
		他	1	0.003
		計	527	1.6
	土師質	皿	31206	95.3
		銅釜	2	0.006
		土釜	10	0.03
		小釜	1	0.003
		他	19	0.05
		計	31238	95.4
	鉄釉	碗	65	0.2
		鉢	5	0.015
		壺	4	0.012
		他	3	0.009
		計	77	0.2
	灰釉	碗	8	0.02
		皿	30	0.09
		鉢	15	0.05
		壺	3	0.009
		他	2	0.006
		計	58	0.2
	瓦質	香炉	2	0.006
		火鉢	4	0.012
		瓦燈	1	0.003
		他	1	0.003
		計	8	0.02
	国内陶器その他		6	0.02
	近世・その他		114	0.34
	計		32028	97.75
中国製陶磁器	青磁	碗	53	0.16
		皿	25	0.08
		鉢	2	0.006
		香炉	2	0.006
		盤	6	0.02
		花瓶	3	0.009
		他	10	0.03
		計	101	0.3
	白磁	碗	6	0.02
		皿	113	0.34
		杯	13	
		壺	2	
		他	13	0.04
		計	147	0.45
	染付	碗	76	0.23
		皿	77	0.23
		杯	1	0.003
		他	2	0.006
		計	156	0.5
	赤絵		5	0.015
	褐釉	壺	3	0.009
	計		412	1.3

器種			点数	%
	朝鮮	碗	5	0.015
		壺	3	0.009
		他	1	0.003
		計	9	0.03
ベトナム交趾三彩			1	0.003
小計			422	1.3
金属		銅銭	9	0.03
		釘	38	0.1
		鉄砲の玉	4	0.012
		取手	1	0.003
		くさび	2	0.006
		銅片	2	0.006
		丸釘	1	0.003
		他	4	0.012
		計	61	0.2
石製品		硯	2	0.006
		パンドコ	22	0.07
		風炉	2	0.006
		盤	10	0.03
		井戸枠	2	0.006
		玉石	6	0.02
		板石	6	0.02
		笏谷片	6	0.02
		他	21	0.06
		計	77	0.23
木製品		漆碗	11	0.03
		漆皿	1	0.003
		折敷	36	0.10
		へギ板	22	0.07
		曲物	5	0.015
		下駄	2	0.006
		桶材	2	0.006
		将棋駒	1	0.003
		他	89	0.27
		計	169	0.5
		種子	1	0.003
		骨片	1	0.003
		貝がら	2	0.006
		他	1	0.003
		計	5	0.02
合計			32762	100

Ｓ地区　（ＰＬ.10）

越前焼　Ｓ地区は濠と土塁からなり、さらに削平が著しかったので、出土遺物は多くない。中では大甕の破片が多いが、特徴の少ない胴部ばかりである。１は口縁部が立ちがるタイ

プの甕の中でも小型の部類に属する甕である。口縁部の中ほどの膨らみ具合から大甕Ⅳ群cに伴うものと考えられる。擂鉢は2がⅣ群に属し、3は擂目が見られないところから鉢であろうが、口端部が薄く外側に引き延ばれたり、口縁部内側の凹線の幅が広いなど口縁部の形態が他に見られない特徴をもっている。



第8図　第68次調査S地区出土遺物

瀬戸・美濃焼　天目茶碗が10数点出土したが、細片が多く図示できなかった。4は灰釉鉢で口縁部を折り返し端部をカットして整えている。釉は器体の上半分にかかるが、すっかりかせている。胎土は細かく焼成も良好である。端反の灰釉皿類が数点見られる。

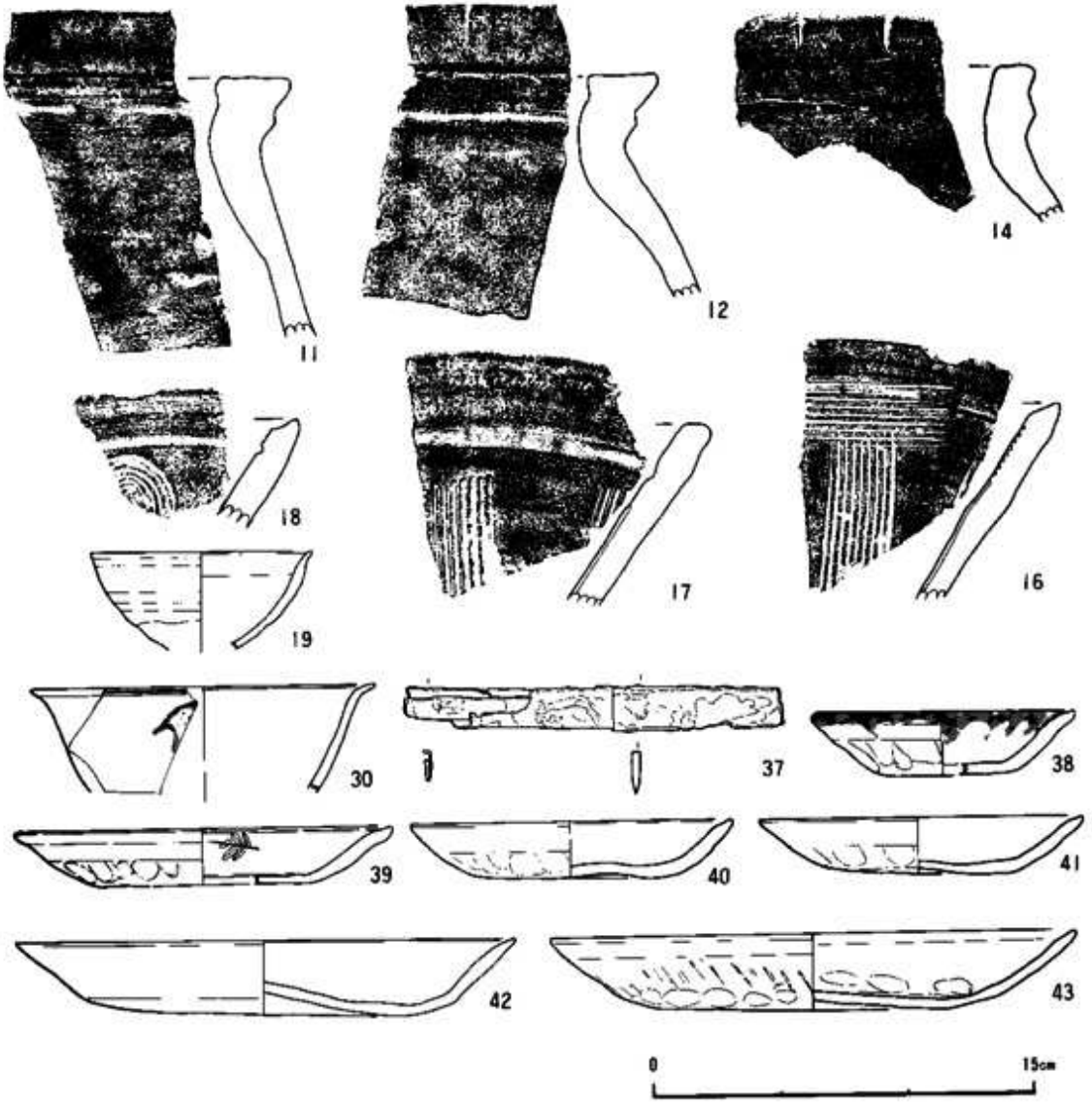
輸入陶磁器　青磁・白磁・染付等中国製陶磁器を主体に小量の朝鮮製陶磁器が出土した。5は口縁部に崩れた雷文体がめぐる青磁碗である。6は稜花皿で口縁部に櫛描の波状文がめぐる。焼成不良で胎土は赤く、釉色も錆色を呈する。白磁は端反の小皿が多い。染付碗は細片が多い。8は饅頭心の碗で、見込みの文様が地の部分を潰す逆青花となっている。7は端反の皿で、外面には宝相華唐草文がめぐる。見込みは玉取り獅子のようである。9は粉引きに属する朝鮮製の碗で、見込みと畳付きのトチン跡は丁寧に研かれている。10は濠のなかから出土した青磁鉢で、見込みと内面体部にはスタンプによる文様が捺されている。体部の文様は吉祥字のようであるが、見込みの文様の意味はわからない。

Q地区　グループ①　（PL.10・11）

越前焼　越前焼きは、大甕が大きいため破片数は多いが、固体数になおすとあまり多くはない。時期がわかる大甕の口縁部を見ると口縁部が肥厚したⅣ群11・12が多い。13・14は肥厚する以前のⅢ群とⅣ群の中間の形態をしている。壺は量的には少なく、15は高さが50cmに達し口縁が直立するタイプの大壺である。擂鉢もあまり多くない。17は口縁端部がや

や角張り端部から沈線までの距離が長く擂目の間隔が広い点からⅢ群と考える。16は口端部が三角になり端部から沈線までの距離が短いⅣ群の擂鉢である。18は擂鉢と同じ器型の鉢であろう。

瀬戸・美濃焼　細片ではあるが量的には天目茶碗が多い。19は口径が8.7cmと小型であるが形そのものは通常の大きさの天目茶碗とまったく変わらない。20はいわゆる椎茸高台の天目茶碗である。21は徳利型の瓶の底部でロクロ成形による跡が底部の内面に残る。腰部から底部にかけての外面はサビ釉が施されている。灰釉は皿が多い。28は灰釉小皿で、付高台がつく。全面に灰釉が施され、高台裏にはトチン跡が付着している。一乗谷ではこのタイプの皿は、端反で見込みには印花が捺されているものが多い。22は灰釉の碗でおそらく天目茶碗型の形をしていたと考えられる。腰から下は露胎となっている。23は三足盤で



第9図　Q地区出土遺物グループ①

口縁内側に受部がつくタイプである。ロクロ整形の跡を残し、灰釉は口縁部のみ施されている。24は生産地がはっきりしない陶器で、おそらく掛け花生であろう。非常にかたく焼き締まっており、内面には筒状にした粘土を捻って成形したような跡が残る。

土師質土器　39はD類で内面に草花文が刻まれており、完形品ではないが口縁に灯心跡はない。40・41は同じくD類でこのサイズまで灯心跡がつくことがある。42・43は直径が20cmあり、胎土も細かく丁寧に作られている。また灯心跡がつくことはない。

輸入陶磁器　量的には青磁と染付が目立つ。青磁では碗・皿なども出土しているが細片が多く表示できなかった。25・26内面が露胎であるところから、おそらく太鼓胴の花生であろう。釉はややくすんでいるがしっかりと施されている。白磁は29のような端反の小皿が主体である。27は白磁の鉢で底部を欠く。「八」状に広がり口縁部がわずかに内湾する。胎土はやや軟質で、15世紀代の遺跡から出土する白磁皿の胎土や焼成状態に似る。染付では底部を欠く小片であるが、端反の碗30が目を引く。口縁部で折れ曲がるように外反する。文様は少なく蝶もしくはフクロウが描かれている。端反の碗は、古いタイプの碗で一乗谷では非常に少ない。31は腰部に芭蕉文がめぐる蓮子碗、32は曲線で密に唐草文を描き込んだ蓮子碗、33は内面の口縁下だけに四方襷がめぐる一乗谷では新しいタイプの碗である。34・35は赤絵の合子で唐草文が描かれている。赤で輪郭をとった後、葉の部分を緑で塗っている。36はいわゆる交趾三彩の水注であろう。鰭と鱗があるところから鯉を象ったものであろう。

金属製品　37は小柄で、柄の部分は銅のこしらえになっている。

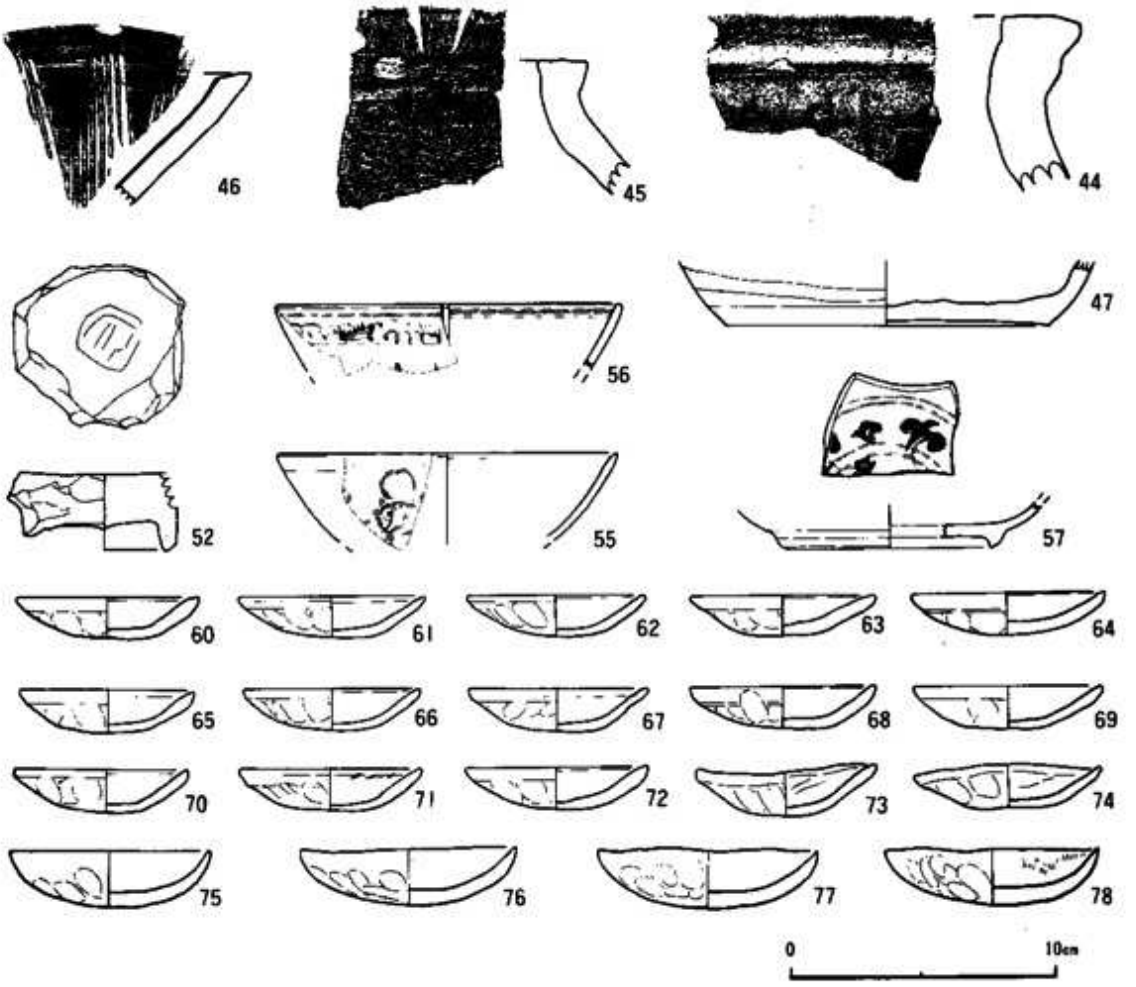
Q地区グループ②　（PL.11）

越前焼　出土した破片数は極めて少ない。44はⅢ群cに属する大甕の口縁部である。45は頸部の無い壺でおそらく胴部には凸帯が廻る。この手の壺のなかでは新しいタイプに属する。46は擂目が口端部までつけられたⅤ群の擂鉢で、一乗谷では最も新しいタイプである。

瀬戸・美濃焼　破片数としてはやはり天目茶碗が多い。50は天目茶碗の高台部でいわゆる輪高台である。48は鉄釉の鉢で口縁部が内側に肥厚している。釉は茶褐色を呈し厚くかかっている。49は細片ではあるが、一乗谷では出土例の少ない鉄釉擂鉢である。51は灰釉の小皿で見込みにカタバミの印花がある。形態は端反の皿と推定され、低い付高台がつく。外面は釉が薄くかせている。

土師質土器　60～74はSK3854から完形品が28枚一括で出土したうちの15枚でC類に属し、60～72はサイズも整形手法も同一といってよい程よく似ている。75～78は整形手法は手づくねのB類であるが、非常に丁寧に作られていて表面もなめらかで口縁部もほぼ平坦である。

輸入陶磁器　52は青磁碗の高台部で、釉色はくすんだ青緑を呈し、全面に施釉した後高台裏の釉を拭き取っている。見込みには吉祥字が捺されているが、字は不明である。53はグループⅠと同一固体の青磁花生で、底部近くには鋲を模した突起がある。底部は露胎になっており青磁釉との境には鉄が吹き出している。白磁は、出土破片数としては端反の小皿が多い。54は碁笥底の杯で器壁が非常に薄い。胎土や焼成状態は端反の白磁皿と同じである。染付は、文様も定かではないほど細片が多い。碗では全体が白磁で口縁部と高台に回線が廻る新しいE群が目立つが、固体数は3～4と推定される。55は割合開いた形の碗で文様は崩れているうえに類例が少ないため不明である。56は口縁下に波状文が廻り腰部には芭蕉葉文が廻る蓮子タイプの碗である。皿は一乗谷では多い唐草文の端反皿が割合少ない。58は外面に唐草文を密に描き込み、内面には羯磨文を描くタイプで、高台が高いところから中でも古いタイプに属する。57は外面が無文で、見込みに唐草文を描く。高台は低いが断面が三角になっており、畳付けの釉は削りとられているところから一乗谷では古い部類に属すると考えられる。59はグループⅠで出土した34と同一固体の合子である。



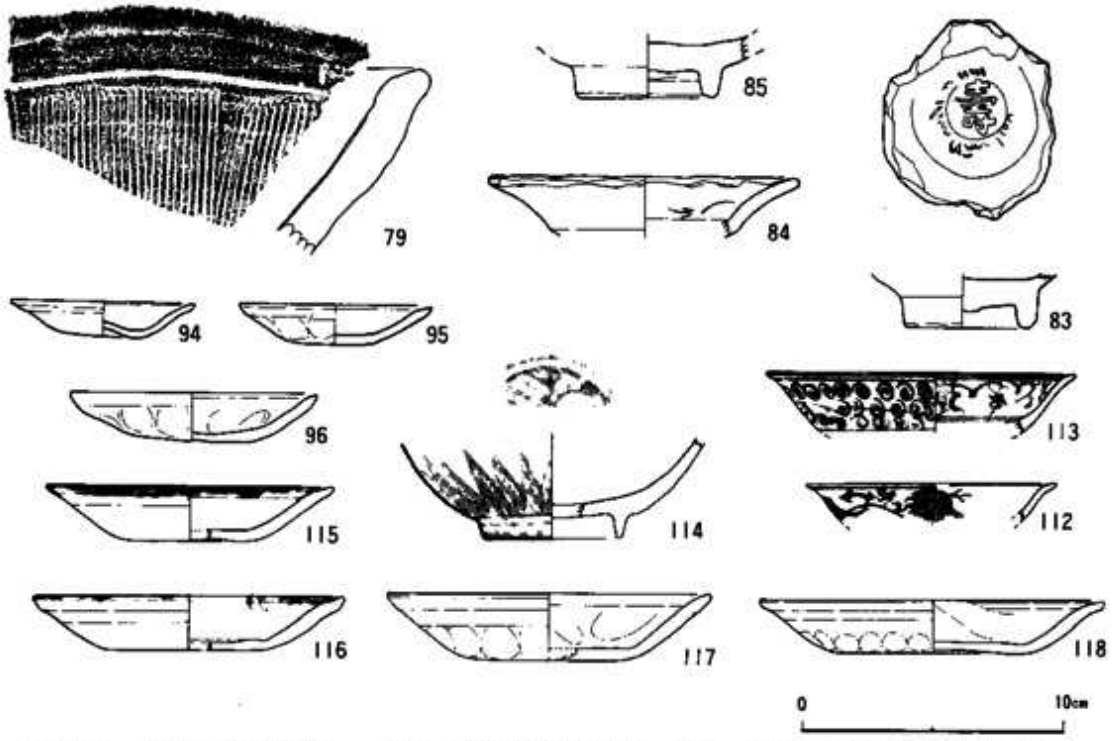
第10図　Q地区出土遺物グループ②

P地区　グループ①　(PL.12)

越前焼　越前焼甕は、口縁の良好な資料が無い。79は口縁端部の近くに沈線があり、擂目も密に施されるようになったⅣ群の擂鉢である。

瀬戸・美濃焼　出土遺物は非常に少なく、天目茶碗の破片が6点、鉢の破片が1点、灰釉皿の破片が5点のみである。80・81は口縁下のくびれがまろやかな、一乗谷では最もよく見られるタイプである。釉は少しかせたような茶褐色で、後の黄瀬戸につながるような釉が施されているのだろうか。胎土はぼそぼそとしており、所謂もぐさ土といわれるものである。

輸入陶磁器　青磁の碗と皿では、破片数は碗が多い。83は底部の厚い碗で、見込には「寿」の吉祥字が捺されている。全面に施釉し、重ね焼きするため高台裏の釉を輪状に削り取っている。また高台裏にはその輪トチンの一部が付着している。釉色は半透明の茶色が混じった濃い緑色である。97は底部の薄い碗で、見込には印花文が捺されている。83に比べると少し作りが丁寧である。これも同じく全面施釉後高台裏の釉を掻き取っている。84は稜花皿で内面口縁部に波状文と櫛描文が施されている。白磁はやはり端反の皿が主体である。87はやや青味がかった白色でこのタイプとしては大き部類に属する。86は白色の釉で最も多い大きさの皿である。染付けも少なく細片であるが、碗と皿の文様が対になるものを紹介する。88は饅頭心のE群の碗で、89は内湾するE群の皿である。91は交址三彩の皿で交址独特の青い釉が施されている。90は朝鮮製の碗で所謂「ソバ茶碗」である。



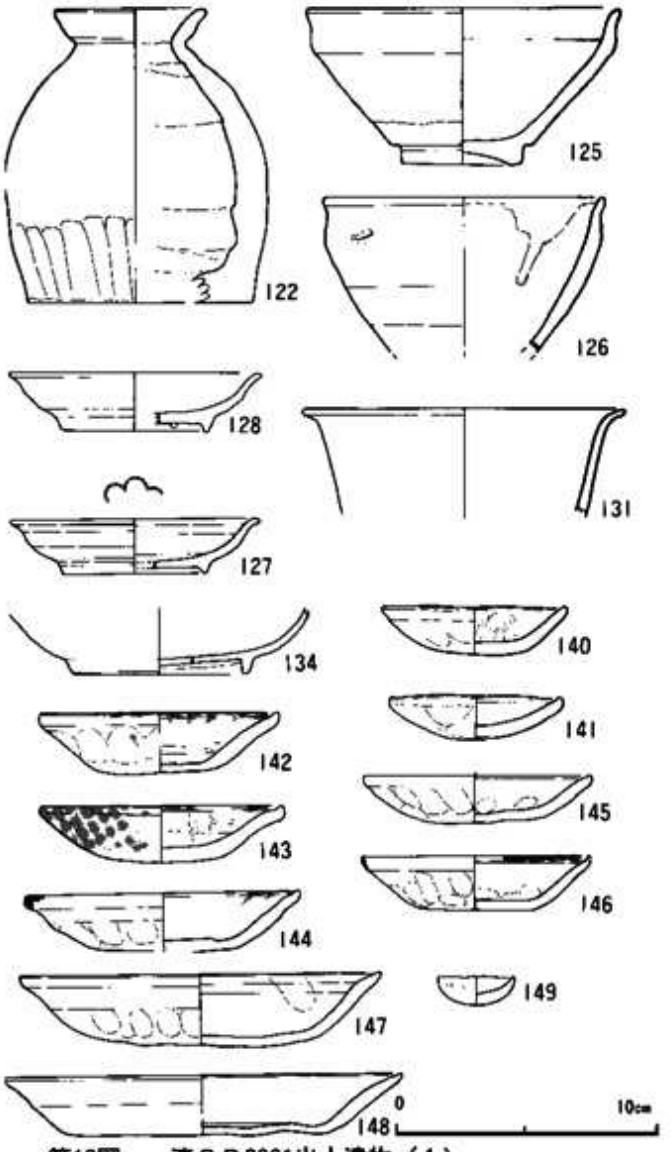
第11図　P地区出土遺物　グループ①(79,83,84,94～96)　グループ②(97,113～118)

P地区　グループ②　（PL.12）

越前焼　越前焼は、良好な資料がない。

瀬戸・美濃焼　出土遺物全体が少ないため、どの地区でも割合多い天目茶碗も98だけである。高台裏を丸く削り取った椎茸高台になっている。釉は後の黄瀬戸に繋がると推定させる少しかせたような茶褐色である。101は灰釉の碗もしくは小壺であろう。99は灰釉皿で付高台がつき高台裏には輪トチンの後が付着している。

土師質土器　97は羽釜で鍔の部分を欠く。一乗谷で出土する羽釜としては大きく口径が25cm前後になりそうである。土師質皿はSD3848内の黒色土の中から多数出土しており、94は所謂「へそ皿」、95はC類1、96はC類2、115～116は口径が14cmより小さいD類1である。灯心跡を描いてないものもあるが、実際には灯心跡があるものの方が多い。



第12図　濠SD2261出土遺物（1）

輸入陶磁器　102は青磁碗の高台部分でわずかに残る体部から印花の捺された碗と推定され、作りはあまり上等とはいえない。103は蓮弁文の青磁碗で線刻の蓮弁がつく。104は口径が19cmとこの手の白磁皿としては最大クラスである。105は内湾する白磁皿で一乗谷では古いタイプの皿である。染付碗は114の1点のみで、腰部に芭蕉葉文が廻り見込には巻貝が描かれている。高台は薄く、畳付けの釉は削り取られている。染付皿では唐草文の変形が密に展開する113と、唐草文と見込には十字花文（見込を欠く）が描かれる112、碁笥底で口縁下には波状文底から体部にかけて鋸歯文が廻る108が出土している。いずれもB₁・C群に属し、一乗谷では古いタイプである。

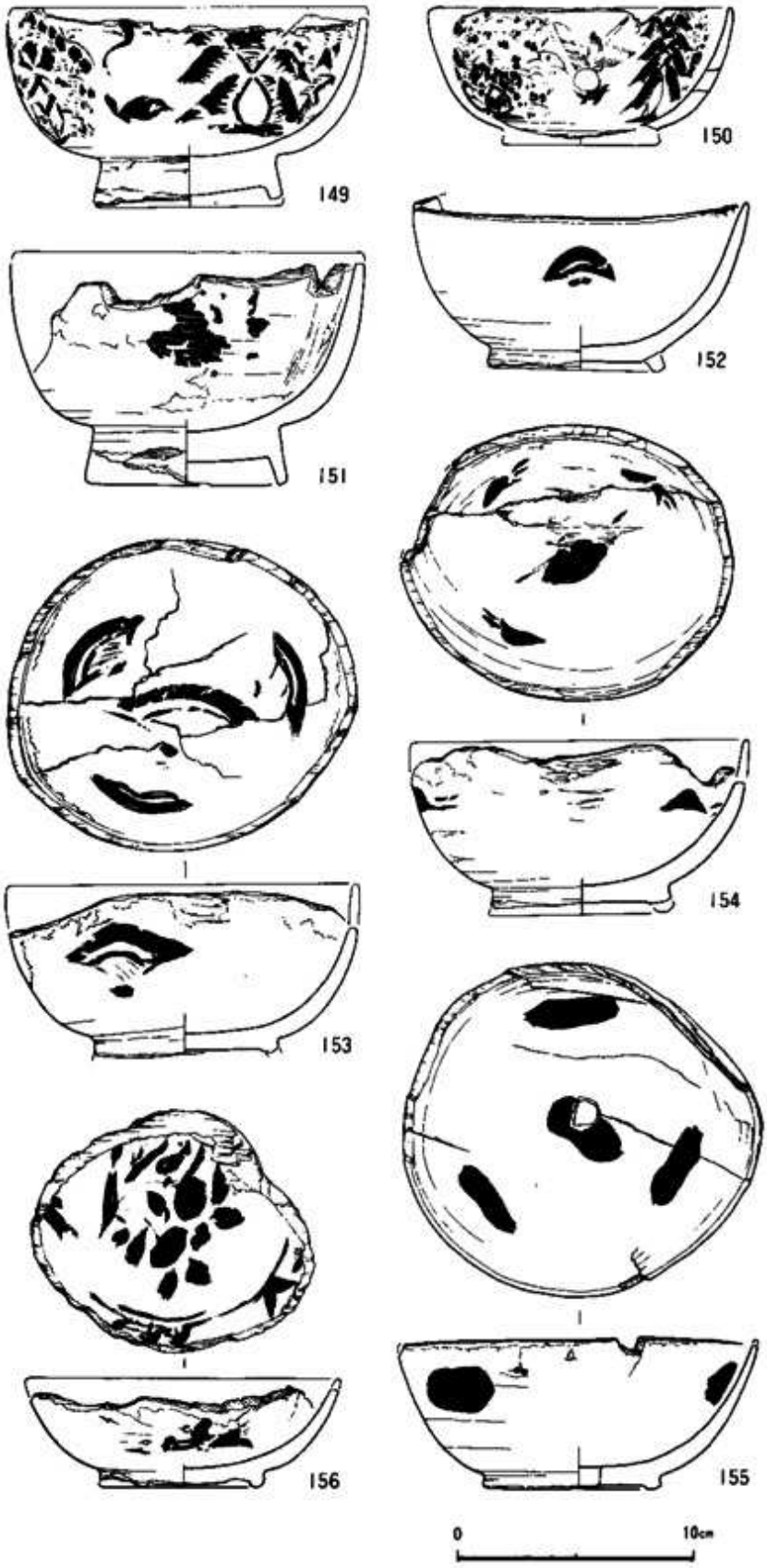
濠SD2261　（PL.13・14・15）

濠SD2266の層序は第6図のようになっていたが、今回は朝倉氏滅亡後の直後までは開いていたと推定される黒褐色腐植土層の遺物を取り上げる。

越前焼　口縁部が肥厚しないⅢ群b119、わずかに肥厚しはじめたⅣ群aも見られるが、出上点数としては口縁部が最も肥厚したⅣ群c120が多い。122はいわゆるお歯黒壺で高さ11.2cmを測る。擂鉢は口縁直下に沈線が廻るⅣ群123.24でいずれも摺り目が密になっている。

瀬戸・美濃焼　125はくびれ部の下から腰部にかけてが直線的になった形態をもち、126は全体に丸味のある形態をした天目茶碗である。釉にも違いがあり前者は茶褐色で細かい褐色混じるのに対して後者は赤みを帯びた黒褐色の釉が流れるようにかかっている。127.28は灰釉小皿で、見込にはカタバミの印花がある。高台は低く高台内には輪トチンが付着している。

土師質土器　土師質皿は量的には格別多くはないが、各種類出土し

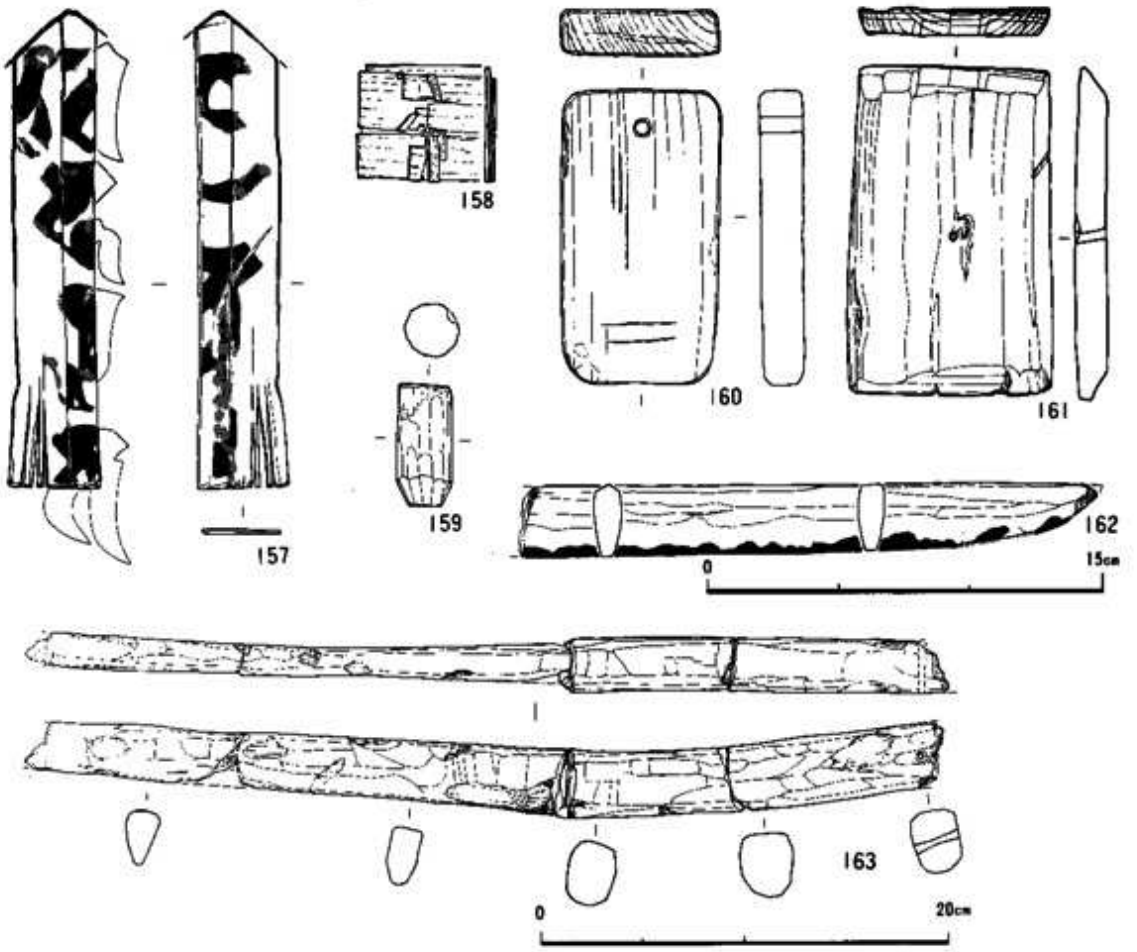


第13図　濠ＳＤ2261出土遺物（2）

ている。140・41はＣ類、142～146はＤ1類、147・48はＤ2類である。148は表面が非常になめらかで、これなら供膳用の皿として用いることができたことを実感した。149は用途不明の土師質である。

輸入陶磁器　青磁碗が２点出土しており、129は細かい線刻の蓮弁文が廻り、130は無文の碗で、高台内の釉は拭き取られている。白磁皿は端反の小皿131～133ばかりである。染付は蓮子碗で腰部に芭蕉葉文、見込には巻貝が描かれているＣ群135と、饅頭心で輪郭を描いた後に中をダミ筆でつぶした唐草文を描き、見込には逆青花になった137がある。138は玉取り獅子の皿である。139は朝鮮製の徳利であろう。外面は内面には鉄釉が施されている。

木製品　木製品では漆器碗が11点出土しており、その内完形品およびそれに近いものは８点ある。149は高台が高いタイプで、口径15.3cm、高さ10.5cmを測る。内面が朱色の漆、外面が黒漆で朱色の漆による文様が描かれている。文様の図柄は草花文・鶴と亀・松とからなっている。150は高台部を欠くが文様構成などは149と共通する。しかし描かれている文様は149が崩れているのに対し150は丁寧に描き崩れがない。151は高台が高く、内外面



第14図　　濠ＳＤ2261出土遺物（３）

とも黒漆で外面に朱色の漆による扇面の文様がある。152～154の３点は、文様構成は151と同じであるが、高台が低いタイプである。155は高台が低いタイプで、文様は俵を描いていると推定される。156は皿で内面は朱色の漆、外面は黒漆が塗られている。漆膜は文様のあるものより少し厚いようである。また図示できなかったが、全面に朱色の漆が厚く塗られているものも出土している。宗教関係では卒塔婆が２点出土した。157はキャ・カ・ラ・バ・ーと梵字がはっきり読み取れる。158は小型の曲物で直径５cmを測る。159はなんらかの栓であろう。160は雪下駄で長さ11cmある。161は桶の内容物をかきまぜる板であろうか。162は刀形で刃紋を墨で描く精巧なものである。大きさからして実物大と考えられる。163は木刀の柄の部分である。作りはやや粗い。

今回の調査では、東半分を除けば石敷の礎石建物ＳＢ3840や石敷遺構ＳＸ3899等遺構の残状況は悪いとは言えない。しかし、遺物については土師質皿が北濠とピットから多量に出土したため、遺物の総点数はこれまでの調査と余り遜色はなかったが、越前焼、瀬戸美濃製品、輸入陶磁器は細片が多く量的にも少なかった。この点西隣の第43次調査では、越前焼、瀬戸美濃製品、輸入陶磁器の出土量は多いとは言えないまでもこれほどではなく遺物の残存状況に偏りが見られる。木製品は北濠の３ｍ四方から11点出土したのに対して、瀬戸美濃製品（天目茶碗を除く）・輸入陶磁器のうち供膳形態のものは30点近くしかなく、供膳形態に占める漆器の割合が想像以上に高いことを示している。木刀や精巧な刀形、小形曲物、下駄等のほか、西に隣接する第43次調査では一節切（ひとよぎり）という尺八も出土しており、これらの木製品は一乗谷の生活復元を豊かにしてくれる。

最後にまとめにかえて、この屋敷の主を推定してみたい。春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」では、中惣地区にあたる位置に「朝倉式部大輔館跡」と書かれている。「一乗谷古絵図」の中で館跡と書かれているのはここだけで、また城戸ノ内においてはこれまでの調査で濠と土塁を有するのは朝倉館跡と今回の調査で確認されたこの屋敷跡だけである。「一乗谷古絵図」の作者や一般的な考え方として「館跡」とするのは濠と土塁が巡っていることが条件であったとするならば、この古絵図が描かれた江戸時代末期までこの屋敷跡に濠が巡っていた跡が残っていたか、もしくはそのことが伝えられていたかのどちらかであろう。そしてそれは「朝倉式部大輔景鏡」の館跡と伝わっていたと考えらる。とすればこの館の主が朝倉式部大輔景鏡であった可能性は高い。また傍証にはなりにくいが、第43次調査では庭園と推定される石敷の遺構ＳＧ2295や地鎮具が出土した礎石建物ＳＢ2264なども挙げられる。

（岩田　　隆）

朝倉景鏡について

今回の調査地字中惣は朝倉景鏡の屋敷跡と推定されている。本節ではこのことに関する文献資料を紹介し、景鏡の朝倉氏の中の立場についてごく簡単に述べる。

まず一乗谷の景鏡の屋敷については『越藩拾遺録』下城地城跡の一乗ノ城の項の末尾に「下ノ木戸ヨリ入、右ノ方ニ朝倉式部景鏡ノ屋布地、石垣等アリ、此西ニ掃部殿ト云フアリ」と記されており、江戸時代に城戸ノ内に伝承地があったとされる。江戸時代末に作成された安波賀春日神社所蔵「一乗谷絵図」にはその位置が示されている。この絵図は一乗谷の屋敷・寺院跡等の伝承地を図示したものとして大変貴重な資料である。当館ではその複製を常設展示しているが、最近『福井市史資料編別巻絵図・地図』で公刊されている。この絵図には多数の注記が付けられているが、未だその全体は翻刻されていないので、基本的文献資料として紹介する（便宜的に番号を付け、旧字は現行の字体に改めた）。

① 河合安芸守跡　② 朝倉角三吾跡　③ 鍔淵将監跡　④ 平井　⑤ 新馬場　⑥ 市原　⑦ 斎藤兵部大輔跡　⑧ 鷹ノ塒跡　⑨ 木蔵　⑩山崎長門守跡　⑪月見山　⑫恩正寺アト　⑬福岡三良右エ門跡　⑭安城　⑮九ノ里　⑯堀江右見守アト　⑰法万寺アト　⑱西光寺アト　⑲天正寺アト　⑳臼井兵部ノ丞跡　㉑赤淵明神跡　㉒遊園寺跡　㉓江守　㉔朝倉掃部ノ助跡　㉕朝倉式部大輔館跡　㉖本妙寺跡　㉗朝倉中務大輔跡　㉘真正寺跡　㉙下城戸口　㉚春日宮　吉田　㉛小林権ノ頭跡　㉜青木隼人正跡　㉝櫓跡　㉞笠場　㉟門ノ内　㊱米津　㊲トウアト　㊳氏景公・貞景公・孝景公御廟所、引化四丁未年吉田青木発而造立、筆ハ心月月泉大和尚、石工弥三　㊴カヽミ岩　㊵小タキ　㊶茶エン　㊷敏景公御廟所　㊸中ノ御殿跡　㊹新御殿跡　㊺義景公御廟所　㊻松雲院　㊼赤淵宮　㊽南陽寺跡　㊾ニハアト　㊿鶴ノ塒　(51)柳ノ馬場　(52)犬ノ馬場　(53)前波九良兵衛跡　(54)瓜割清水　(55)三田崎備中守跡　(56)朝倉右衛佐(ヱニ)跡　(57)弁天宮跡　(58)馬出シ　(59)蔵ヤシキ　(60)朝倉兵庫ノ介(助)跡　(61)朝倉権ノ頭跡　(62)八幡宮　(63)小淵ノ上　(64)朝倉斎兵衛跡　(65)光林坊跡　(66)魚住出雲守跡　(67)櫓跡　(68)三ノ丸　(69)二ノ丸　(70)一ノ丸　(71)月見櫓跡　(72)観音跡　(73)万畳シキ　(74)フドウ清水　(75)千畳シキ　(76)櫓跡　(77)月見山

以上の注記の中には某跡としてその屋敷の主の名がみえるものがある。㉕朝倉式部大輔館跡として景鏡の名もみえる。多くの注記の中で景鏡の屋敷だけに「館跡」と記されていることは多少の注意を要するであろう。『越藩拾遺録』の記載をみると景鏡の屋敷跡は下城戸を入った所にかなり目立っていたようである。石垣（土塁）が残存しており明確な一区画をなしていたものと考えられる。

朝倉景鏡は朝倉貞景（天沢）の二男景高の子である。父の景高は孫八郎と称し、ついで右衛門大夫といった。大永年間（1521～27）前後から大野郡司であったが、天文9年（15

40）当主孝景（大岫）と不和になり将軍からも勘当されて同12年に九州に落ちのびたという。景鏡の生年は詳らかでないが、天正２年（1574）に嫡子が10才だったというのでそのころに生れたとも思われよう。

景鏡の名が初めて見えるのは永禄７年（1564）９月の加賀出兵の時で両大将のひとりとして出陣した。早くから朝倉氏一族（同名衆）の有力武将として認められている。ところが、この時一族の敦賀郡司景垙が大将になることを争って自殺するという内紛があり、当主の義景も出馬するのである。同９年９月足利義秋が敦賀に入ると義景は景鏡を代官として遣わす。義秋は敦賀に一年以上滞在し、この間に敦賀郡司景恒（景垙の弟）は中務大輔に、景鏡は式部大輔に任ぜられる。これらの官職は朝倉氏としては義景が左衛門督に任官しているのにつぐ高い格式のものである。景鏡も大野郡司であったことが知られるが、その就任年月日は詳らかでない。上述の事績をみると、そのころすでになっていたとみるのが自然であろう。石徹白の白山中居神社の社人の石徹白家や桜井書の文書には景鏡の礼銭・贈答の返報の書状があり、彼が「郡職」に就いたこともみえる。

景鏡は一乗谷に入った義秋（昭）の朝倉館御成りの際に度々景恒と席次を争っており、彼らが同名衆中の上位にあったことがわかる。その後、元亀元年（1570）４月織田信長が敦賀を急襲した際に景鏡は府中に兵を止めている。このため景恒は退城を余儀なくされて面目を失なうのである。その後も景鏡は義景から信頼されて同年５、６月の近江北郡・美濃追撃の大将を勤め、11月の堅田合戦でも活躍し、同３年７月の小谷城救援の出兵でも先陣を勤めた。しかし、翌天正元年７月の江北出兵は拒否し、義景は江北で大敗を喫し一乗谷に逃げ返る。そして景鏡の勧めにより大野に退却し、逆に景鏡に囲まれて自滅するのである。景鏡は信長方に降り、赦されて信長の臣となり名を信鏡と改め土橋と称したという。

朝倉氏の滅亡の後、前波長俊が信長から越前の守護代に任ぜられ、彼は一乗谷の朝倉館に居を占めて内外に朝倉氏の後継者たることを示した。しかし、翌天正２年正月には越前の各地で一揆が蜂起し、同19日長俊の拠る一乗谷は陥落して長俊も殺されるのである。桜井家文書によれば信鏡は天正２年２月～４月に大野郡内の知行宛行を行なっており、そのころ信長の直臣として大野郡を支配したことがわかる。一方『朝倉始末記』によれば、そのころ彼は「大野ノ堺寺」に居住しており、一揆の襲撃を恐れて平泉寺に入ったが、４月15日平泉寺は落城し景鏡も討死したという。

以上のように、景鏡は終始大野郡司として朝倉氏の同名衆に高い地位を占め、義景からも信頼された。彼の一乗谷の屋敷跡が「一乗谷絵図」に特別の呼称を持ち、その位置が景恒の屋敷と並んでいるのは、このような経緯をみると興味深いものがある。

（佐藤　　圭）

Ⅲ　第70次調査　（吉川和男宅移転新築に伴う事前調査）

第70次調査は、福井市安波賀町14字土居本11－1における吉川和男氏宅新築に伴う現状変更の事前調査である。調査期間は平成2年6月6日から同14日。調査面積は100㎡。

調査地は、下城戸の北約40mの所に位置し、特別史跡境界線に接してある。下城戸や外濠の第35次調査時の結果から、今回の調査地も遺構の残りは良いものと考えられた。

遺　　構　（PL.16）

畑の土を厚さ 0.2m排土し、礫の多く混じった焼土層を検出した。この面が朝倉時代に比定されるが、調査区北端で南北方向に並ぶ4石の石列が検出されただけであった。焼土の厚さは 0.4mあり、土師質皿片が多く含まれていた。その下層には、焼土、炭混じりの暗褐色粘質土が0.2～0.4mの厚さで堆積しており、間に砂の層が幾層も挟まっていた。その下の砂、砂利層は自然堆積とみられる。調査区を南北に走る石垣は、石の積み方等からみて、朝倉時代より新しいものと判断された。石垣の東側で道路面が検出される可能性もあったが、石垣の根は自然堆積の固い層で、礫で埋められていた。

以上の所見から、この調査区は、一乗谷川の度重なる氾濫によって遺構面が完全に流失してしまったものと考えられた。

遺　　物　（PL.17）

遺物は、11,443点を数える。内訳は表－3に示したとおりである。このうち2910点は、調査区西半の焼土層から出土しており、その約96.5%は土師質皿で、以下越前焼約 1.5%、中国陶磁器約 0.6%、瀬戸・美濃焼 0.3%等であった。焼土層の主な遺物をみると（第14図）、越前焼は、口縁が肥厚したⅣ群の甕1、土師質土器は、A類2、B類3、C類4～7、D類8～10の皿、中国陶磁器では、線描蓮弁の青磁碗11、刻花文の盤13、磁質の胎土に白濁した釉がかかり、高台内に朱色の付着物の残るB群の白磁皿14、外面胴部に渦状の密な唐草文、内面にアラベスクを配し、底部がい

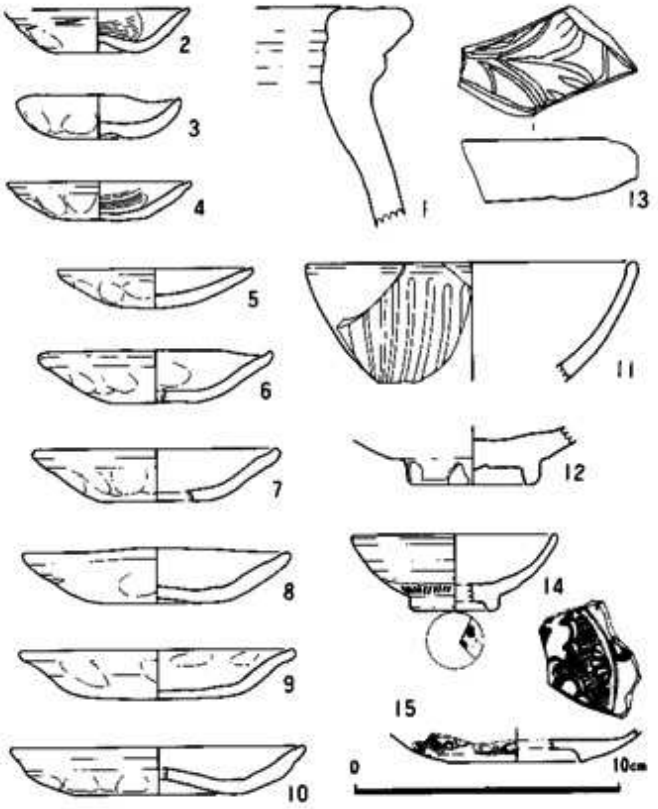
第3表　第70次調査出土遺物一覧

器種				点数	%
日本製陶器	越前焼		甕	170	
			壺	31	
			鉢	7	
			擂鉢	84	
			その他	8	
			小計	300	2.62
	土師質土器		皿	10,798	
			土釜	31	
			土鍋	7	
			その他	5	
			小計	10,841	94.74
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	20	
			皿	1	
			その他	3	
			小計	24	0.21
		灰釉	碗	4	
			皿	26	
			その他	3	
			小計	33	0.29
	瓦質土器		瓦燈	1	
			その他	2	
			小計	3	0.03
	計			11,201	97.89
中国製陶器	青磁		碗	28	
			皿	16	
			盤	1	
			小計	45	0.39
	白磁		皿	29	
			坏	2	
			その他	1	
			小計	32	0.28
	染付		碗	13	
			皿	17	
			その他	1	
			小計	31	0.27
	計			108	0.94

器種		点数	%
朝鮮製陶磁器	碗	1	
	皿	5	
	その他	2	
	小計	8	0.07
土師・須恵		2	0.02
近世陶磁器		42	0.37
金属	銅銭	12	
	釘	5	
	その他	9	
	計	26	0.23
石製品	パンドコ	8	
	盤	2	
	砥石	2	
	その他	9	
	計	21	0.18
その他	壁土	18	
	その他	17	
	計	35	0.30
合計		11,44	100.0

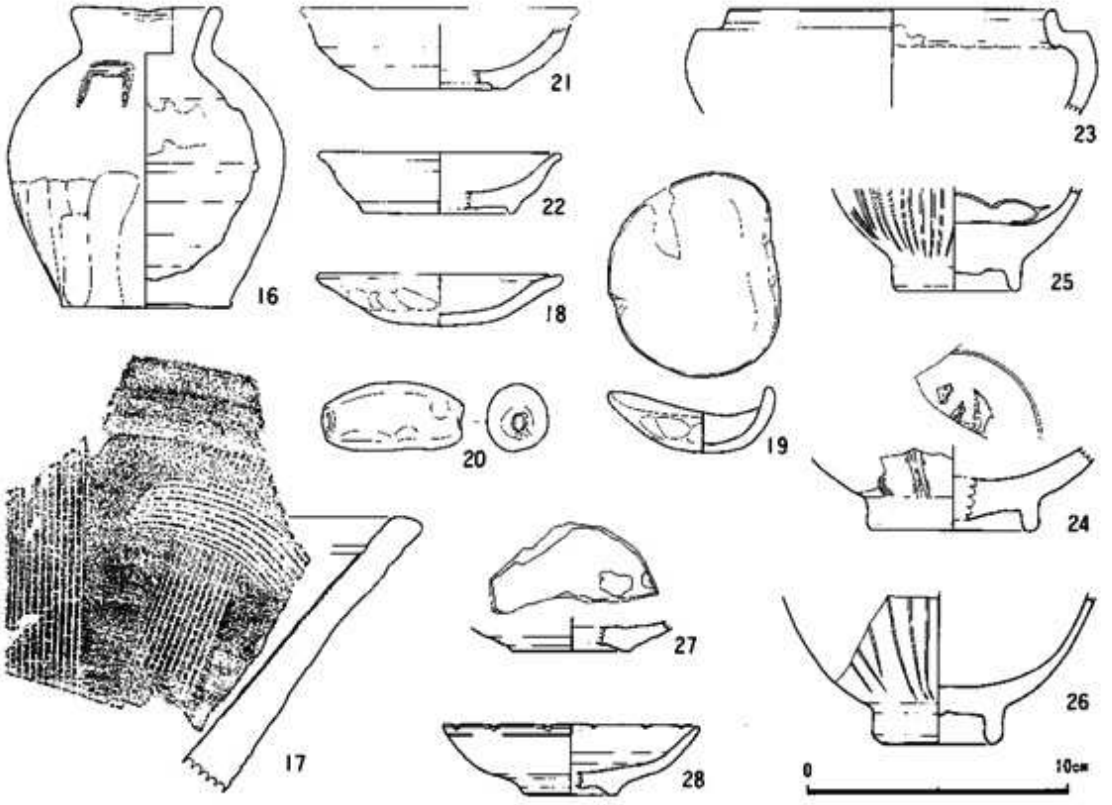
わゆる碁笥底の染付皿C群15等がある。

焼土層より上層で出土した遺物（第15図）には、お歯黒壺に用いられ、内面に鉄錆が付着する越前焼小壺16、Ⅲ群bの擂鉢17、C類の土師質皿18、口縁の一端を故意に折り曲げた同皿19、土錘20、底部を碁笥底風につくる鉄釉皿21、口縁が端反りの灰釉皿22、瓦燈の身23、鎬蓮弁風に蓮弁を描く青磁碗24、線描蓮弁文の同碗25・26、ソバ茶碗風で、やや赤味を帯びた釉がかかる朝鮮製の皿27、同じく灰黒色の釉がかかる28等がある。　（月輪　泰）



第15図　第70次調査遺物（1）

1.越前焼壺　2～10.土師質皿　11・12.青磁碗　13.青磁皿　14.白磁皿



第16図　第70次調査遺物（2）

16.越前焼壺　17.同擂鉢　18・19.土師質皿　20.同土錘　21.鉄釉皿　22.灰釉皿　23.瓦燈（身）　24～26.青磁碗　27・28.朝鮮皿

Ⅳ　第71次調査（現状変更申請に伴う細田憲一氏宅の家屋新築工事の事前調査）

調査の経過　本調査は現状変更申請に伴う、福井市城戸ノ内町14字2－1・2、3、4－1・2にかかる家屋新築工事の事前調査である。対象地は旧県道鯖江・美山線に沿った畑地で、朝倉氏遺跡管理事務所と公園センターの施設とは一乗谷川を挟んだ南側の対岸にあたる。調査区は旧県道に沿ってほぼ南北方向にグリッドを設定し、E－W15m、N－S21m、面積にして約300㎡を発掘した。史跡指定の行われた昭和46年前後は水田であり、その後県道のかさ上げなどに伴い、厚い盛土がなされていた。期間は11月9日から12月19日までであった。

調査区の層序　全体の層序は、畑地のために客土された砂土と史跡指定後になされた盛土で覆われた水田面が地表下80cmにあり、更にこの水田耕作土の下位に、火災が原因と思われる炭・灰層がみられた。これらに覆われた民家の建物群が調査区全体で検出された。部分的に更に下層を掘り下げたが、その部分では民家建物群の整地層の下位に砂礫層があり、地表下約180cmで、少量の朝倉氏時代の遺物を含む砂礫混じりの粘質土層が見られた。遺構は伴わず、面も不安定な状況を呈していた。

以下、良好な状態で検出された民家の建物群について若干の説明を行う。

遺　　構（PL.18）

SB3911　石敷面を伴う礎石建物で、南北方向に棟を有する建物と考えられる。東側は調査区の範囲を越えて更に延びていくものと判断される。現状で南北方向に約10.35m、東西約2.55m分を検出した。この建物は更に西側と南側に約0.95mの張り出し、庇を持つものと考えられる。

調査区の西側、西南隅の井戸SE3924が検出された面で礎石及び石敷・石列・通路等が検出されており、確かなプランは不明ながら礎石建物の存在を推定することが可能である。ただ、SB3911とは軸方位が異なり、レヴェルから見ても多少上位にあることから、時期が一段階新しくなるのかも知れない。

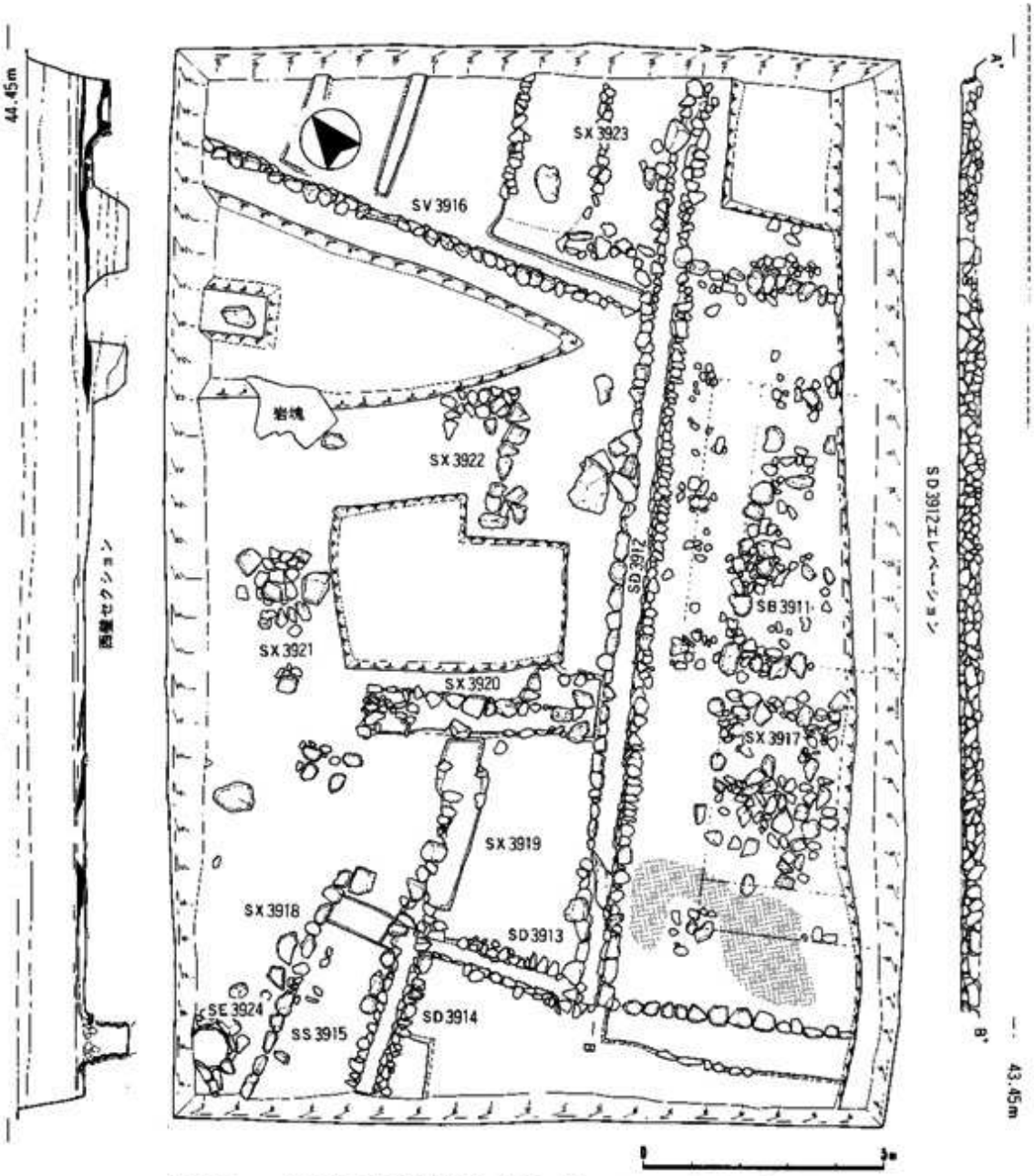
SD3912　ほぼ南北方向に走る溝で、幅0.5m、深さ0.35mを測る。エレベーションからも理解されるように、偏平な河原石を丁寧に隙間なく野面積みにしている。調査区の北端部でやや荒れているが、ほぼ調査区を貫いており南側でSD3913と直角に連結する。流路はエレベーションからもわかるように北行している。

SD3913　東西方向の溝で長さは約3mである。SD3914によって閉じられた形跡がある。幅、深さともにSD3912と同規模である。

ＳＤ3914　南北方向の溝で約３ｍ分検出した。この溝は更に南に延びて行くものと見られる。ＳＤ3913を遮断した形跡がある。

ＳＥ3924　径0.8mを測る井戸である。１ｍ程掘り下げたが、狭くて落石の危険性があることと、季節がら水の滲みだしがひどいことで発掘を中止した。近世以降の波瓦破片や湯呑、酒ビン、ガラス破片等々が出土した。

ＳＶ3916　調査区北側を東西方向に走る石垣である。２～３石が丁寧に積み上げられている。ＳＤ3912とは直交せず、北に15°ほど振れている。この石垣とＳＸ3923とは0.25ｍの段差がある。ＳＤ3914やＳＸ3918、3919、3922の軸方位と直交しているものと考えられる。



第17図　第71次調査遺構全測図及セクション，エレベーション

従ってＳＤ3914がＳＤ3912と時期差があるとすれば石垣列もＳＤ3912とは時期を異にして構築されたことが考えられる。

ＳＸ3923　溝ＳＤ3912に並行して並ぶ石列であるが、この石列の周囲は礫が密に集められていた。２列見られるが、西側はレヴェルはやや低い。この西側は竹の根が腐食した状態で広がっていた。「竹藪」であろう。その更に西側は畝状の高まりが２本見られる。炭・灰が充満していた。

以上、近世以降に立てられたものと考えられる民家の遺構について、その概略を説明してきた。後述するが、出土した遺物の年代観からは、到底朝倉氏時代の遺構とは考えらず、石垣の積み方からも時期の下がることを想定せざるを得ない。セクション図からも理解されるように遺構全体に炭・灰層が見られ、北の部分、特に石垣ＳＶ3916あたりでは厚く堆積していた。ＳＸ3923やその西側の畝状の高まりの部分では２層にわたって堆積がみられた。北側あるいは川側に向かって炭・灰を掻き寄せた結果のものと考えられる。火災にあったことが想定され、火災以前に中央の南北溝を境として２時期にわたる礎石建物の存在が想定されるが、火災以後には同じ場所に立て直されることなく水田化されていったことが土層の堆積状況から窺える。

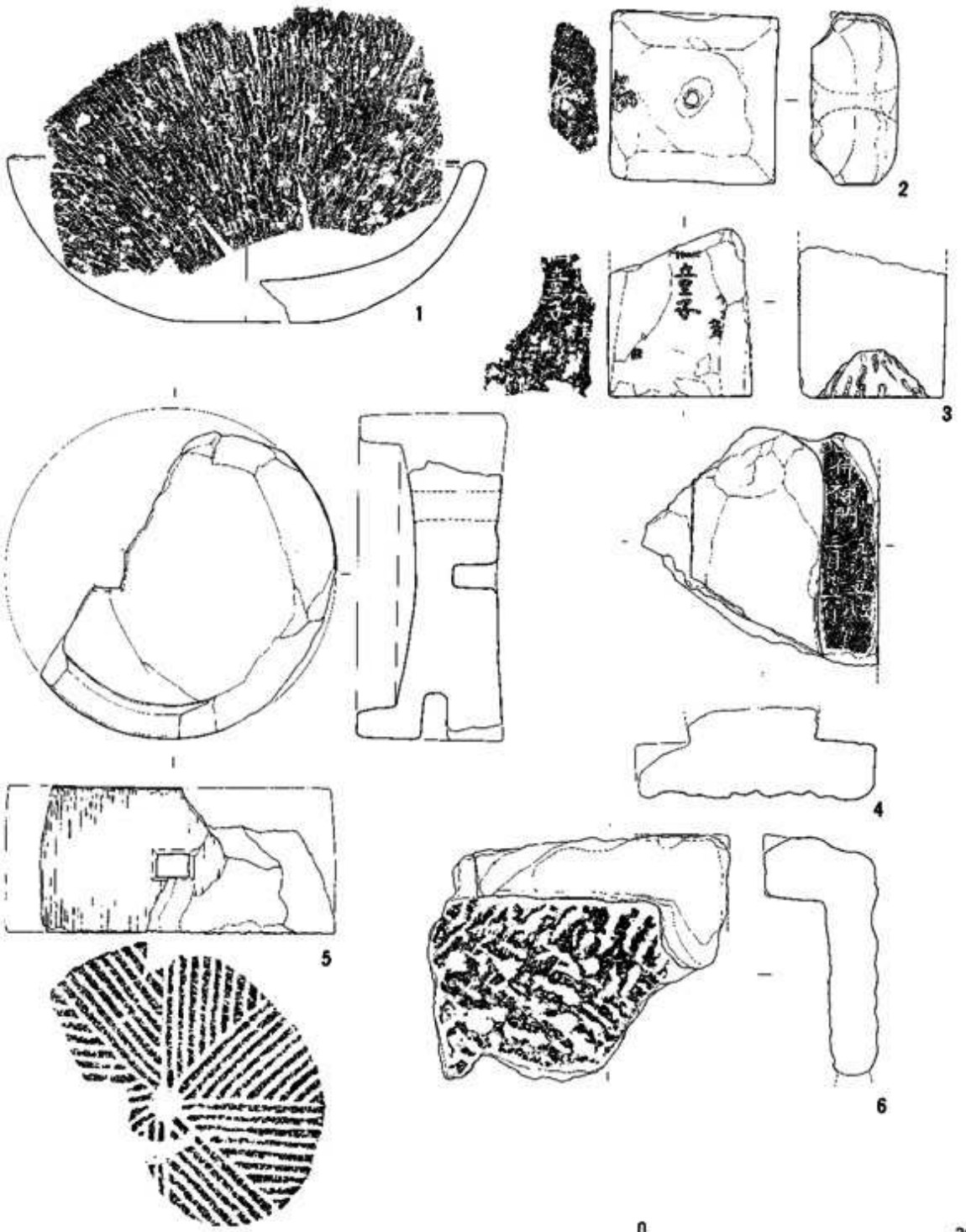
遺　　物（ＰＬ.19）

出土した遺物は前述したように、民家に伴うものが大半で明治時代以降の所産と考えられるものが主体を占める。内訳は国産陶器の波瓦（赤瓦）が目立っており、他に擂鉢、飯茶碗、湯呑茶碗、塩壺、手塩皿、灯明皿、ガラス瓶、瓦質陶器（行火・火鉢）、石製品等がある。そしてこれらに混じって、朝倉氏時代の遺物が少量みられる。遺物の点数は2,132点で、朝倉氏時代の遺物は200点であった。朝倉氏時代にかかる遺物のうち石製品が比較的まとまっており、今回はこれらの遺物を紹介するにとどめる。出土した層位は民家の礎石建物が検出された面直上の旧水田耕作土ないしは炭・灰層である。火災にあった民家の埋め戻しに使用されたものかと思われる。民家に直接関係する遺物（石敷面に使用されているシャクダニ石等）は除外してある。

第17図１はシャクダニ石製の捏鉢である。口径43.6cmを測る。２は１辺15.2cmの一石五輪塔笠部（火輪）である。石材はやはりシャクダニ石製で「蓮」の刻文がみられる。中央に貫通する孔が穿れており、後世の加工による２次活用が考えられる。以下、紹介する遺物は５を除いてすべてシャクダニ製品である。３は一石五輪塔、ないしは笠塔婆の基部である。「・・童子」の刻文が中央にみられる。供養年月日は不詳である。４は地蔵仏の破片で現存高21.6cmを測る。右脇に「・・・佛禅門　永禄五　壬戌　三月廿六日」の銘が

みられる。氏名については不詳である。5は粉挽臼の上臼部分である。溝（播目）は8区画で1単位10本で構成されている。回転方向は左である。形態としては側方に挽手を有するものに分類される。石材は砂岩系のものが使用されている。遺存度は良好である。6は盤の破片である。全体の形状、法量は不詳である。

（南　洋一郎）



第18図　第71次調査区出土石製品

V　環境整備

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が領国支配の拠点とした所であって、ここには山城・城戸・居館・家臣団屋敷・寺院・町屋などの遺構が良好に、かつ、面としての広がりをもって遺存し、我が国の歴史を知る上で、欠くことの出来ない史跡として知られる。この良好に遺存する遺構をして「自らを語らせ」、ここを訪れた人々が「歴史と生きた対話をする」ことを目標とし、『史跡公園』化を進めることが事業の目的である。今年度は、その第５次５か年計画の４年度にあたり、計画に基づき、昨年度発掘調査を実施した南陽寺跡（第64・65次発掘調査区）整備工、昨年度の朝倉館外濠復原整備工に引き続く同外郭修景工、そして、諏訪館庭園と河合地区仮駐車場を結ぶ園路造成工を実施した。

以下、その工事概要を報告する。

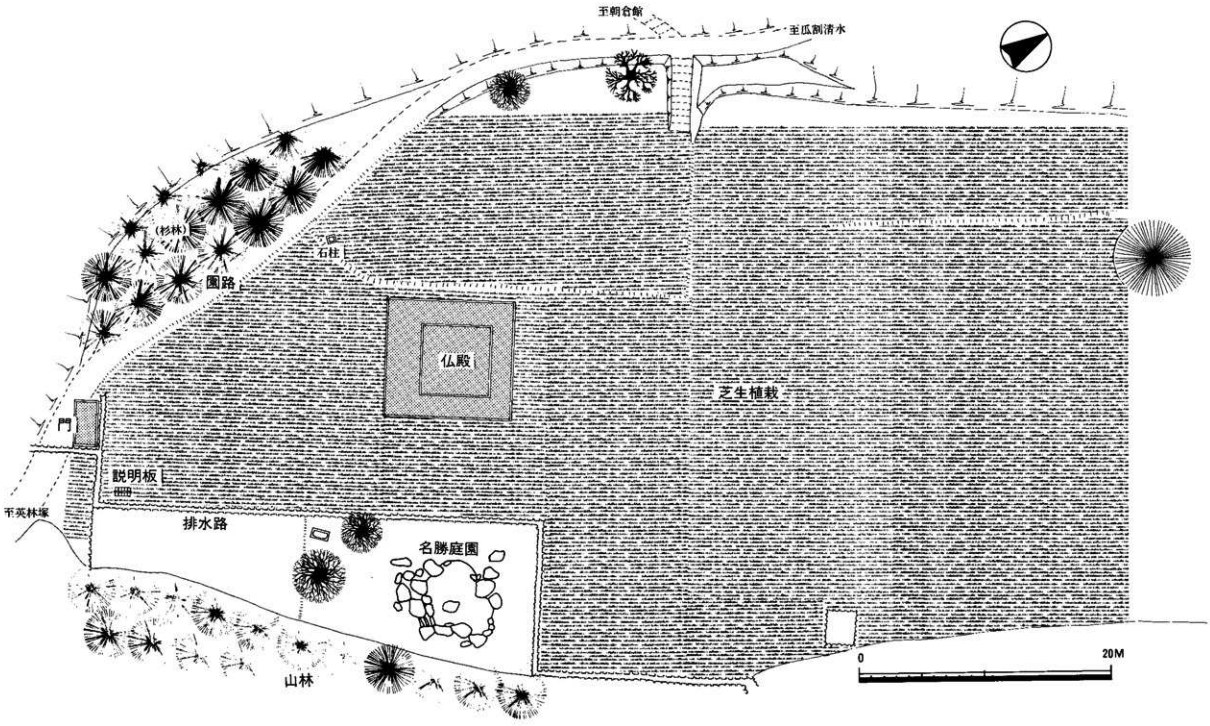
南陽寺跡整備工　（ＰＬ.20・21）

本工事は、平成元年度に第64・65次発掘調査を実施した福井市城戸ノ内町字難陽寺地係約3,200㎡を対象とし、検出遺構の保存整備を目的とする事業である。工事の設計は当資料館で行い、この設計書に基づき造園業者を対象とする指名競争入札により施工業者を決定し、施工した。

工事の対象となった南陽寺（跡）は、朝倉一族と深い関わりを持つ寺で、５代城主朝倉義景が居住したことが判明している朝倉館の北東、高低差約15m、広さ約4,700㎡の段丘上に位置する。記録を見ると、南陽寺は３代城主朝倉貞景（1486～1512）が再興し、「仏殿」等を整備したこと、永禄11年（1568）春、足利義昭等を招き、爛漫と咲き誇る糸桜の下で歌会を催したこと等が知られる。また、この時のものと考えられる国指定名勝南陽寺跡庭園の石組が現存する。

発掘調査の結果、遺構の残存状況は余り良好とはいえず、山裾部を除けば削平されたところが多く、断片的な遺構が多い。しかし、寺の中心となる仏殿跡と推定される五間四方の根石群や寺の南辺を示す石列及び門跡等が検出されており、寺全体の構成を知ることは出来る。また、ここは前述したように名勝庭園が存在し、かつ、遺跡のほぼ中程にあって中心部を展望することが出来る。こうした点から、整備方針は、寺の基本構成を表示し、加えて、庭園の周辺に快適な緑地空間を創出することとした。

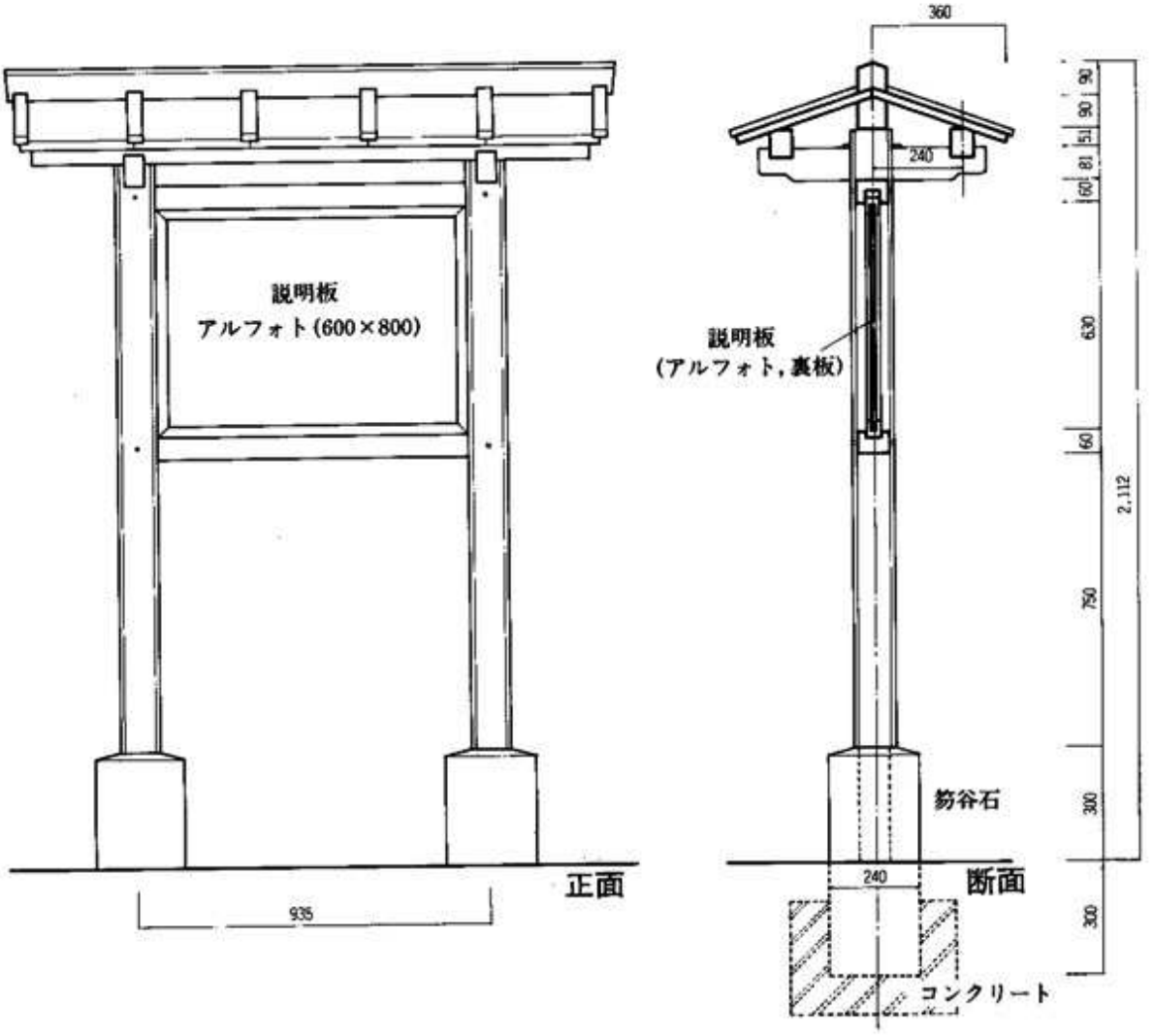
そのため、基本的には全体を埋め戻しし、検出した遺構の保護を計った。高台に位置し土砂の搬入路を欠くため、埋土は主として発掘調査時に生じた排土を用い、これに山砂を加え整地した。そして、これを押さえることを兼ね全面に芝生の植栽を実施した。また、仏



第19図　南陽寺跡整備工全体図　(1／300)

殿・門建物跡は、上部に砂：砂利（1：1）に少量のセメント（40kg／砂0.15㎥）を加えた舗装により表示した。なお、この建物規模を示す縁取にはアスファルトブロック（茶、25×120×250）を用いた。また、寺域のほぼ中程の山裾から豊富な湧水がみられる。これが西の段丘下の民家裏へ流出しており、若干の危険も想定されるところから、この流出する水量を減じるため、ネトロンパイプ（∅100）と砂利の組合せによる暗渠排水路と、玉石（∅200）による排水路を設け、朝倉館外濠へ分水することとした。

また、発掘成果を示す案内板を設置した。案内板の形状については遺跡内において統一を計ることにしており、基本的には3種を設定し使用している。今回は、南陽寺跡という環境を重視し、小規模で立ち上がるものということから木製基台方式を採用した。説明板はアルフォト（600×800）とした。設置場所は遺跡内をめぐる園路脇に位置する南門近くとし、庭園鑑賞に支障のないように配慮した。



第20図　木製説明板詳細図　（1／20）

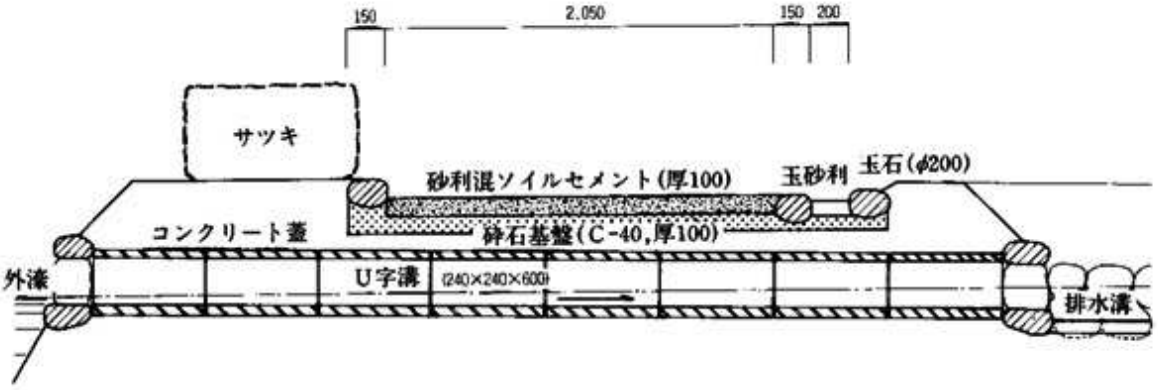
朝倉館外郭修景工 （ＰＬ.22～24）

朝倉館外濠を通過していた旧県道が廃道となり、これを受け、昨年度は外濠の復原整備を実施した。本工事は、これに引き続き、これまで仮駐車場等として利用してきた外郭部北半を修景し、外郭全体の輪郭を明確に表示し、あわせて見学者のための広場の創出を図ることを目的とするもので、福井市城戸ノ内町字新御殿及び上川原地係約5,000㎡を対象とする。工事の設計は当資料館で行ない、この設計書に基づき、造園業者を対象とする指名競争入札により施工業者を決定し、実施した。

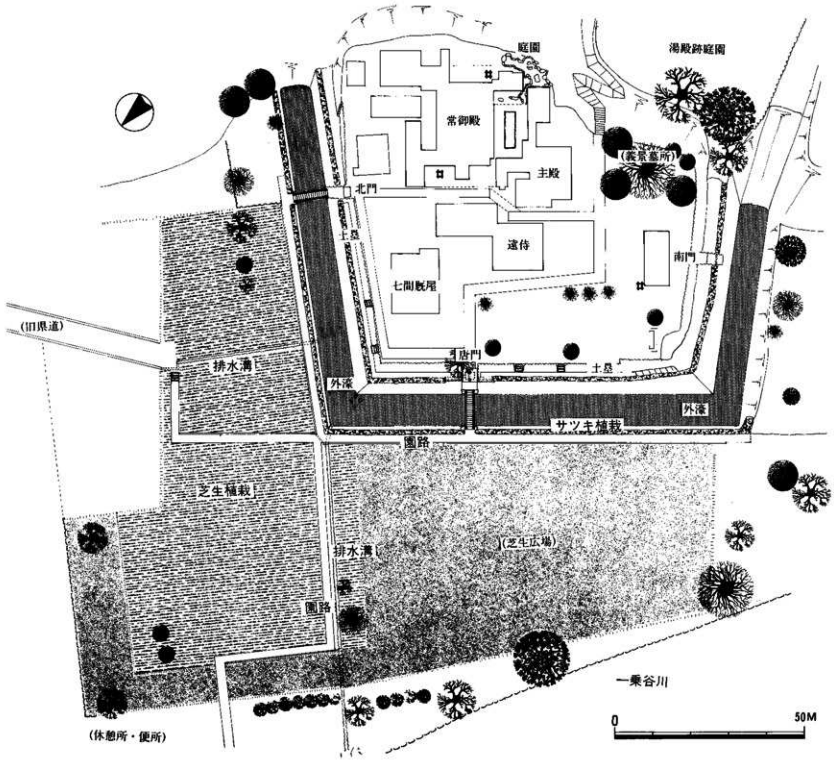
工事は、まず、昨年度の外濠復原工事に際して生じた泥土の乾燥を待ち、これを敷均し、さらに期間をおき十分乾燥させ、整地して芝生の植栽を行なった。また、東北部の南陽寺跡の存在する段丘部の裾部からは湧水がかなり見られるので、これに対処するためネトロンパイプ（∅100）と砂利を組み合わせた暗渠排水を設けた。

外濠には周囲からの水が流入するが、この水位を保つための排水路と旧来の水路を確保するための水路を設けた。これは日常の管理の配慮から、基本的には開渠とすることとし、側壁は玉石（∅200内外）２段積みとした。また利用者の見学ルートとしての園路を設けた。これは外濠や排水路にそって計画した。園路の幅は2.1mとし、玉石（∅200）による縁取りを行ない、砕石基盤（厚0.1m）の上に、山土：砂利（１：１）に小量のセメント（40kg／山土0.15㎥）を加えた舗装（厚0.07m）とした。また一部には玉砂利による排水路を設けた。

本工事の完成により、朝倉館外郭部約10,000㎡の修景整備がほぼ完成したこととなる。この外郭部に接した旧河川域には休憩所・便所も設置されており、現在、年間約30万人程とされる遺跡見学者、中でも学習で訪れる児童や生徒の団体にも十分対応することのできる容量を持つ良好な広場が完成した。



第21図　園路・暗渠（断面詳細図　1／40）



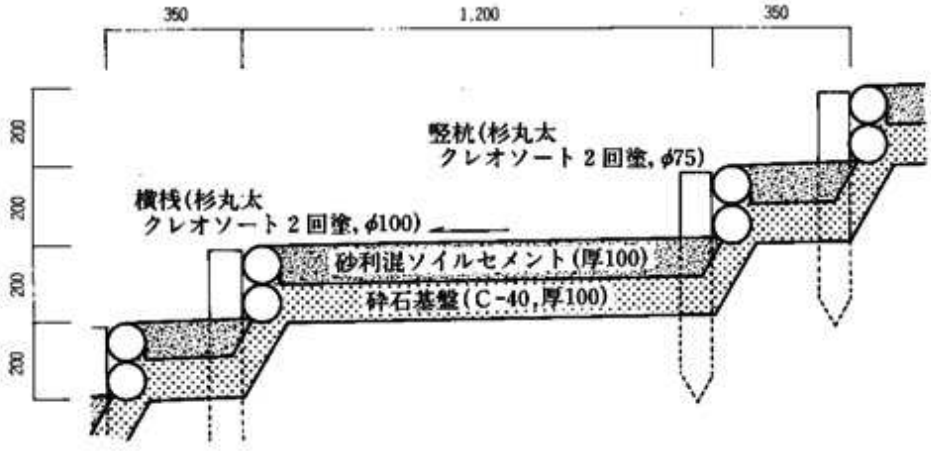
第22図　朝倉館外郭修景工全体図（1／1000）

諏訪館園路整備工 （ＰＬ.25・26）

本工事は、河合地区仮駐車場から名勝諏訪館跡庭園へ至る園路を完成しようとするもので、福井市城戸ノ内町字米津及び上蛇谷地係、約50mが対象である。一乗谷川と諏訪館の存在する段丘との間はいくつかの水田に区画されており、段丘下の林道と橋のたもととの間には約５ｍの高低差がみられる。園路は水田の区画に沿って矩折に配し、ゆるやかなスロープ（勾配９～16%）とした。幅は1.5m、玉石（∅200）で両側を縁取りし、砕石基盤（厚0.1m）の上に、山土：砂利（１：１）に少量のセメント（40kg／山土0.15㎥）を加えた舗装（厚0.07m）とした。なお、スロープの勾配の変化位置には杉丸太（∅100、クレオソート２回塗）を置いた。諏訪館へ至る急斜面は高低差約８ｍで、旧来より山道が存在していた。これを利用し幅1.5m、蹴上0.2m、踏面0.3～0.4mの階段とした。構造は杉丸太（∅100、クレオソート２回塗）２本組、園路同様の基盤・舗装した。安全と地形に合わせるため２ヶ所の踊り場を設けた。

この園路により、仮駐車場から諏訪館庭園、中の御殿、湯殿跡庭園、そして朝倉館へと回遊する園路網がほぼ完成した。

（古岡　泰英）



第23図　登り階段（断面詳細図　１／20）

◀調査地区全景
（南から）

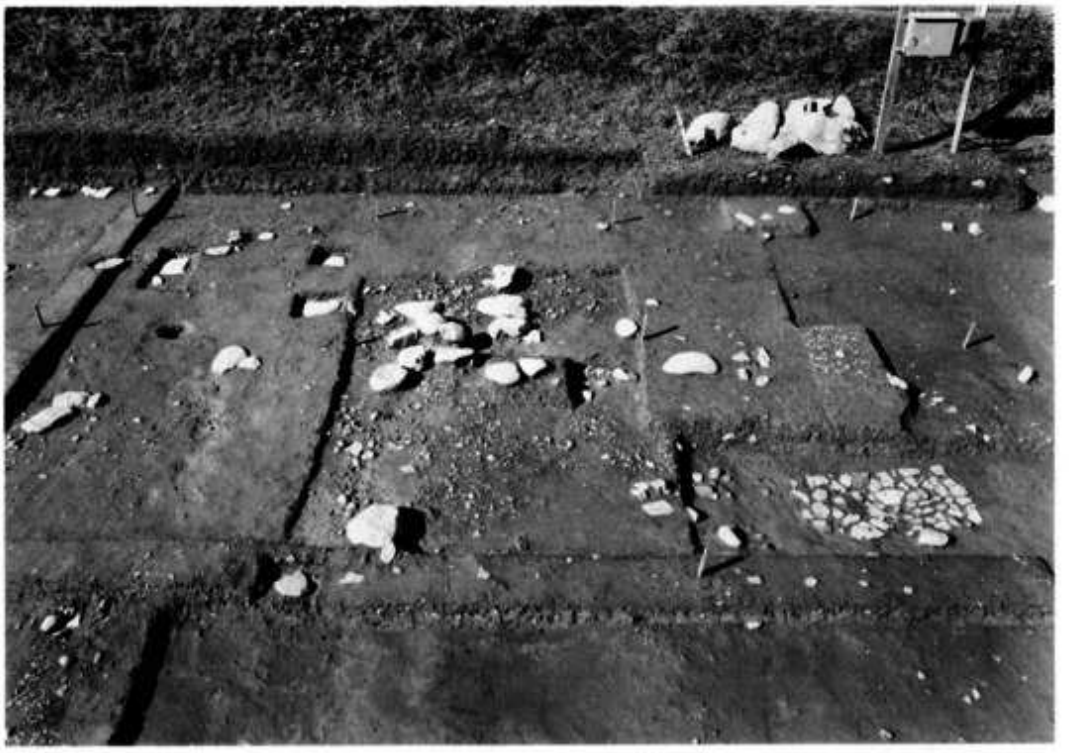
▼調査地区全景
（北から）

石敷建物ＳＢ3840　（北から）

石敷建物ＳＢ3840　（東から）

通路ＳＳ3864　　（東から）

Ｑ地区南西部　　（東から）



礎石建物ＳＢ3841・3842・ＳＸ3885　（東から）

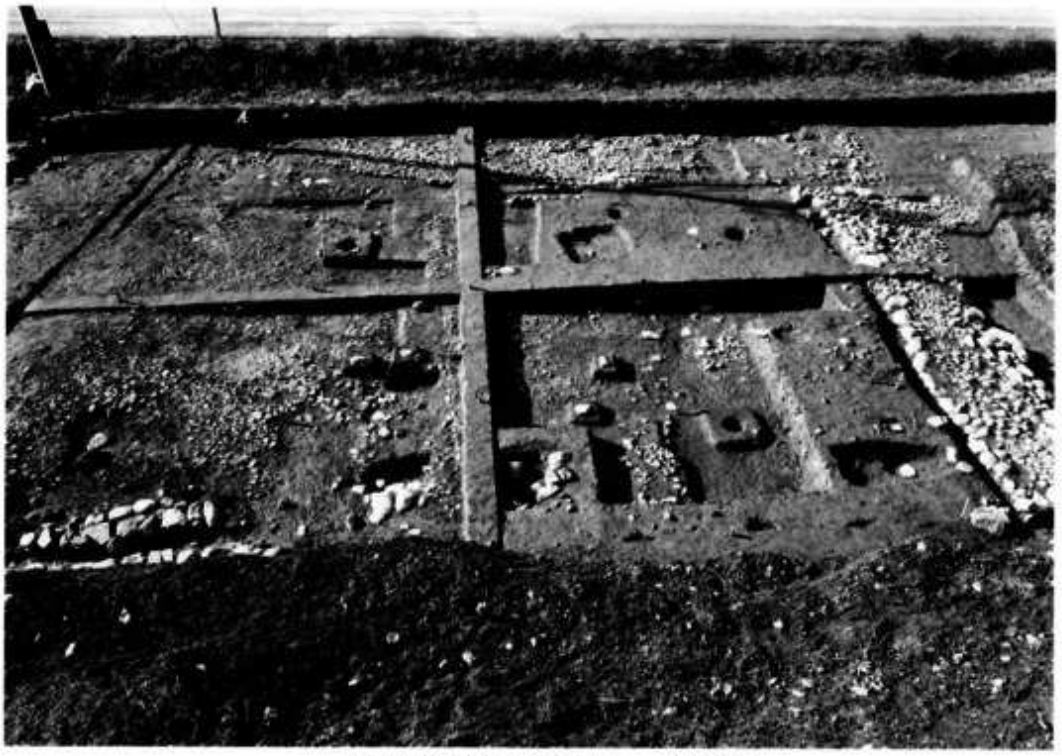
Ｑ地区中央部北寄りＳＡ3845　（南から）

Q地区北寄りSA3845　　(東から)

礎石建物SB3843　　(東から)

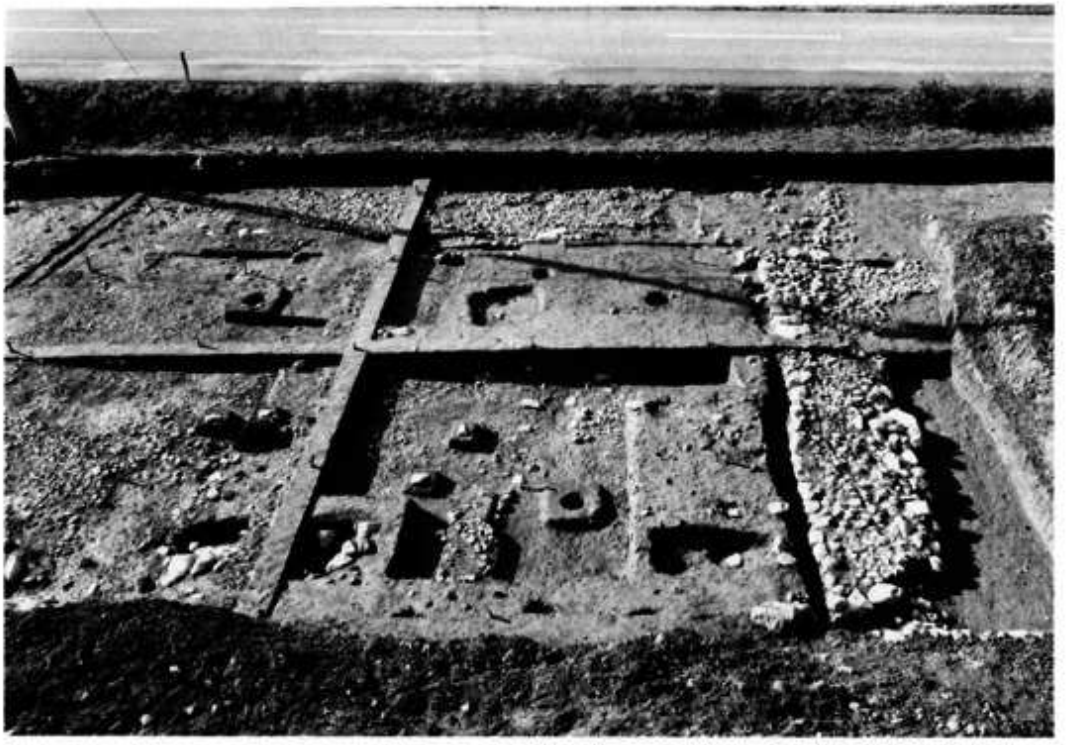
SD3847・SX3892・SX3893　（東から）

P地区　（南から）



石敷ＳＸ3899・ＳＤ3848　　（東から）

通路ＳＳ3865　　（西から）

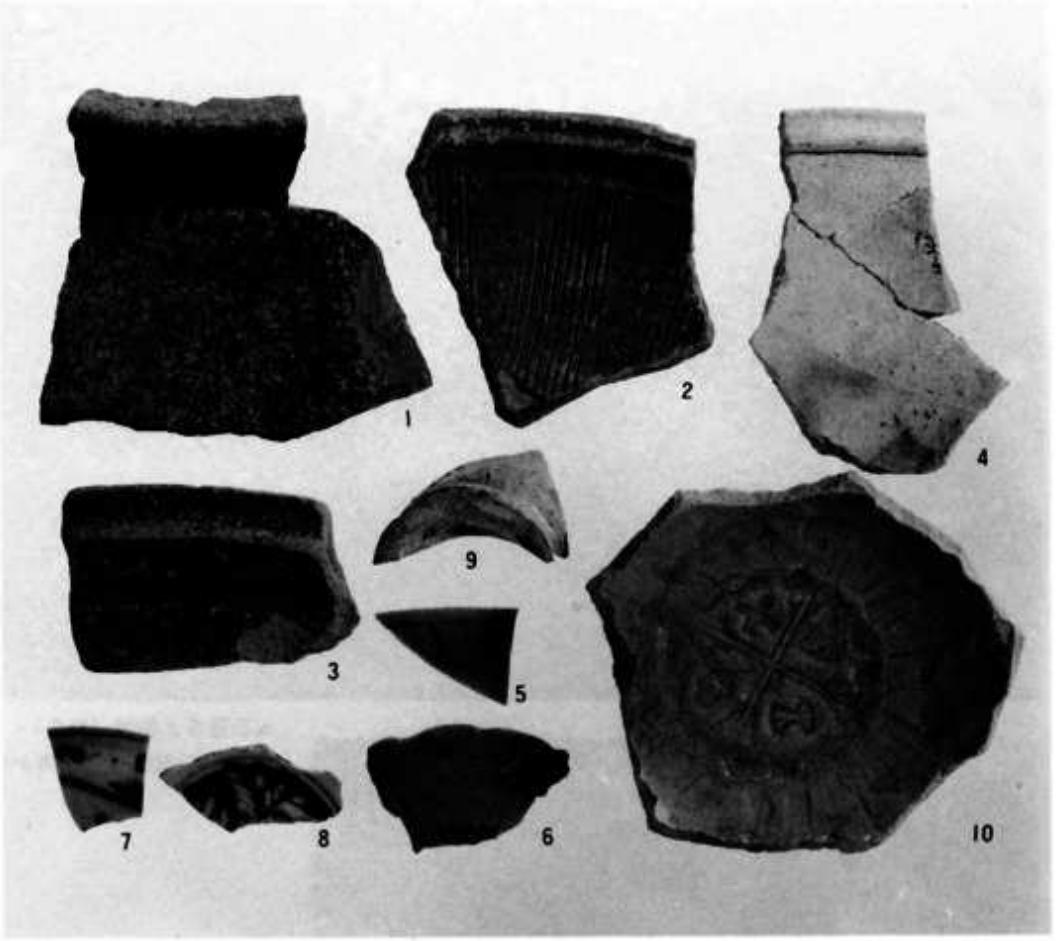


▲石敷ＳＸ3899・通路ＳＳ3866
（東から）

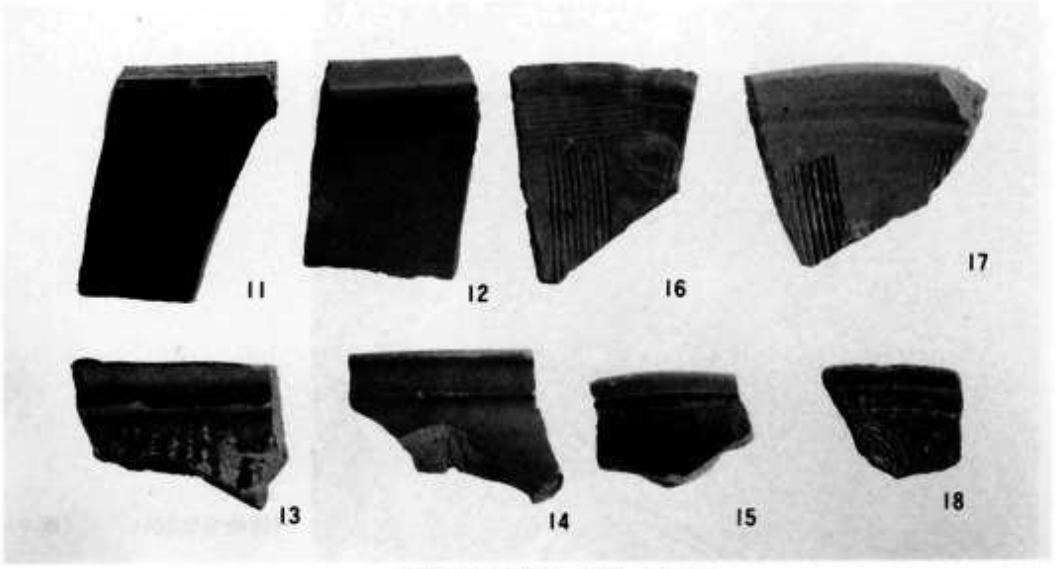
◀通路ＳＳ3866　　（西から）

▲石敷ＳＸ3899（部分）・
溝ＳＤ3848　　（西から）

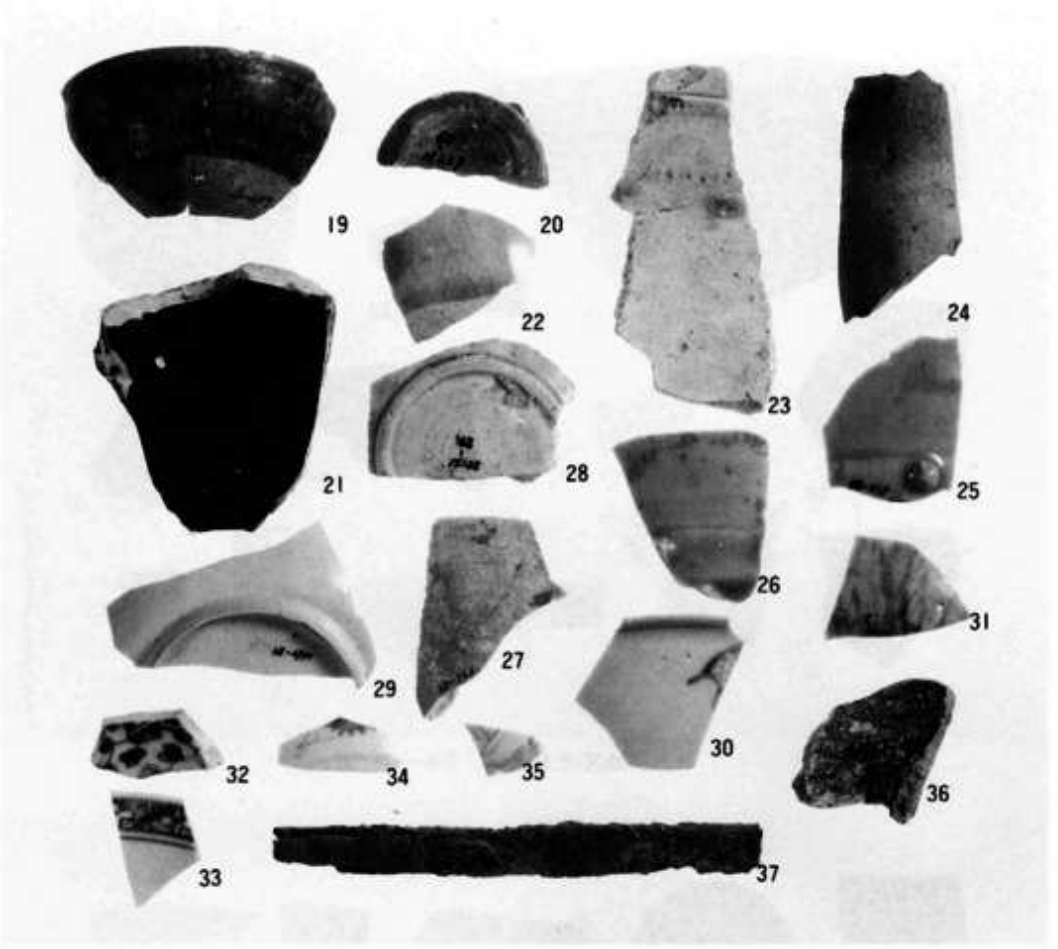
◀建物ＳＢ3844　　（南から）



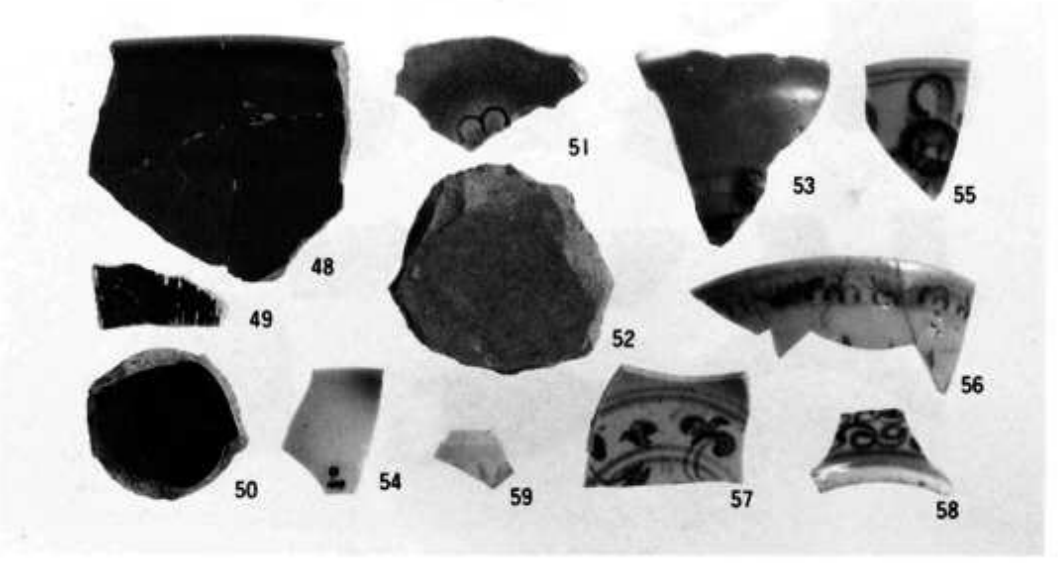
S地区出土遺物



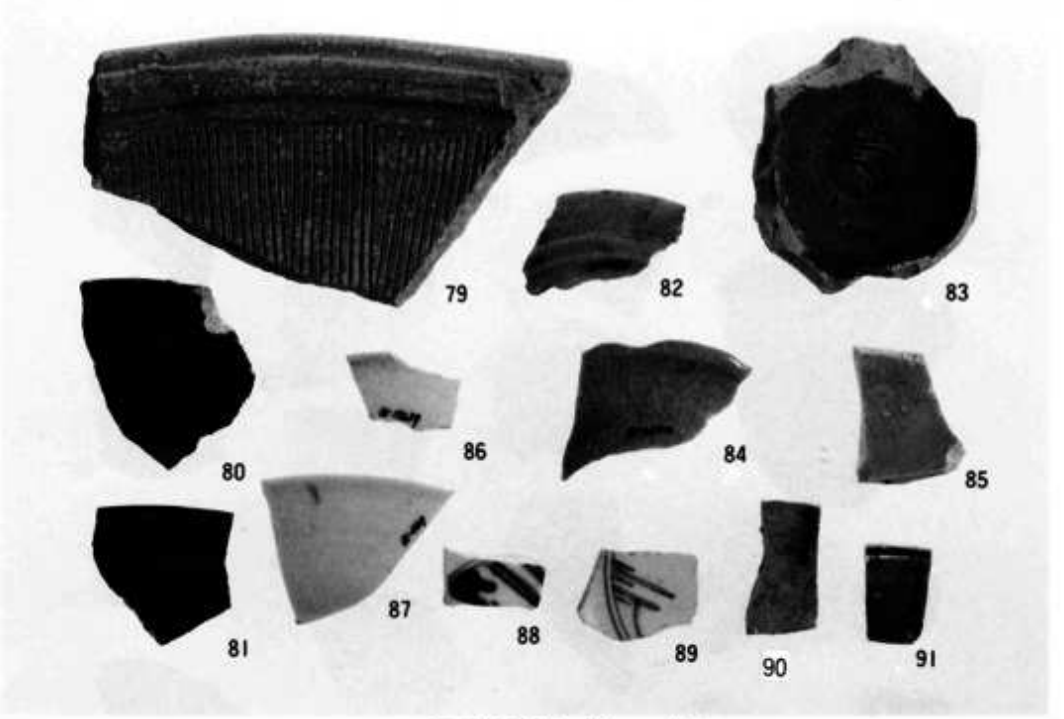
Q地区出土遺物　グループ ①



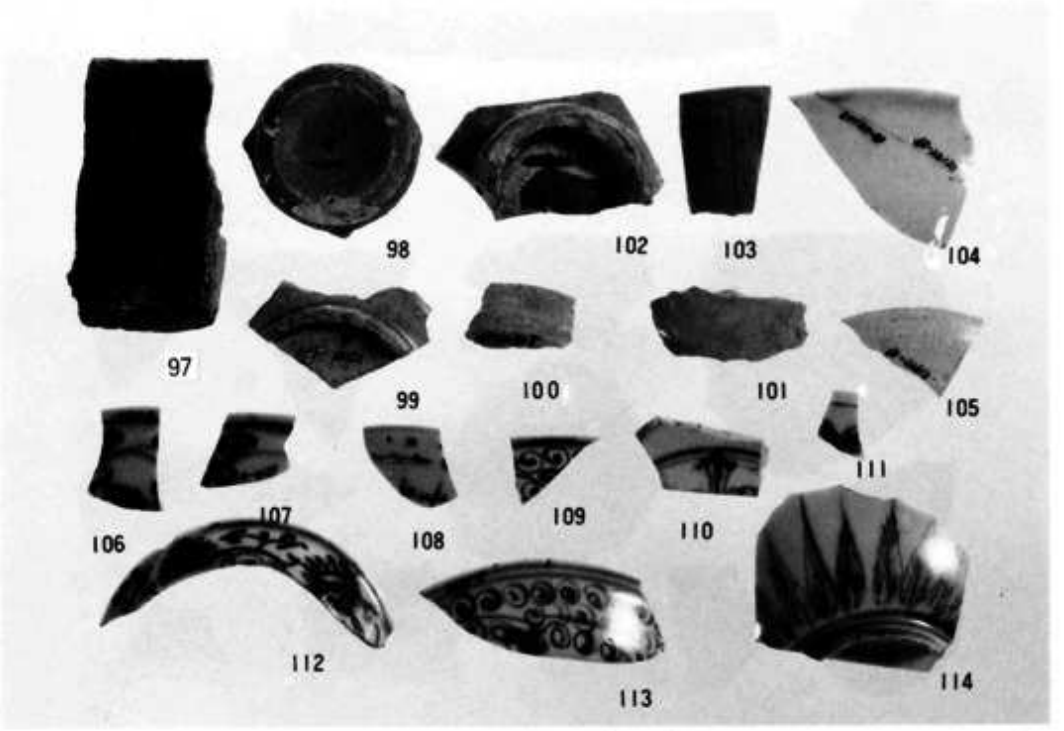
Q地区出土遺物　グループ ①



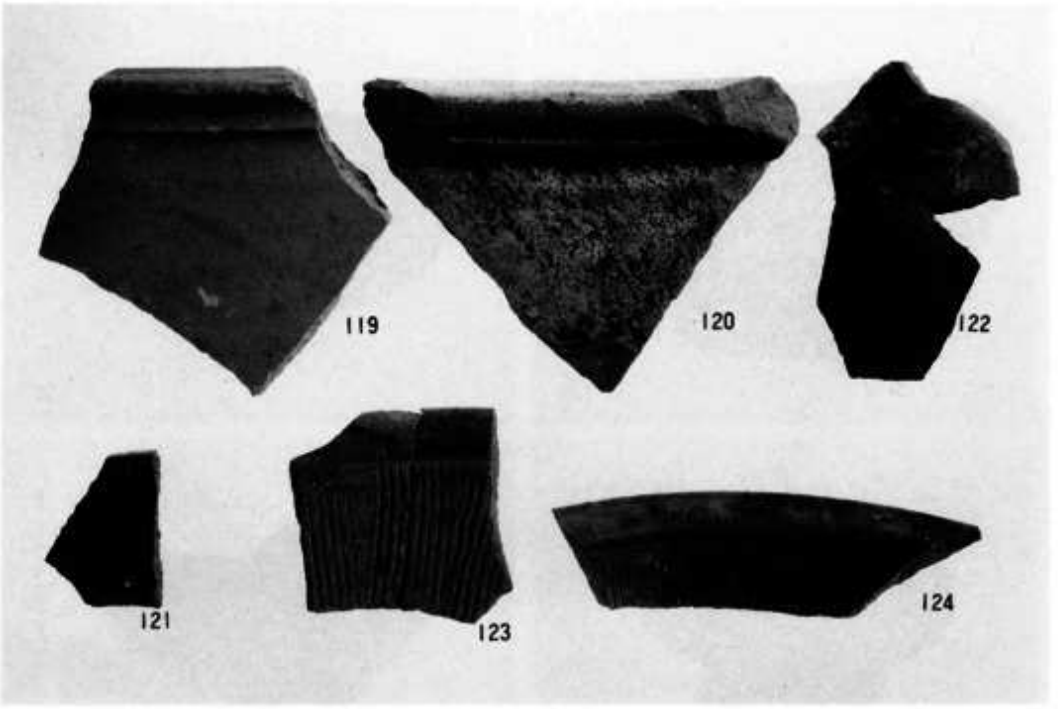
Q地区出土遺物　グループ ②



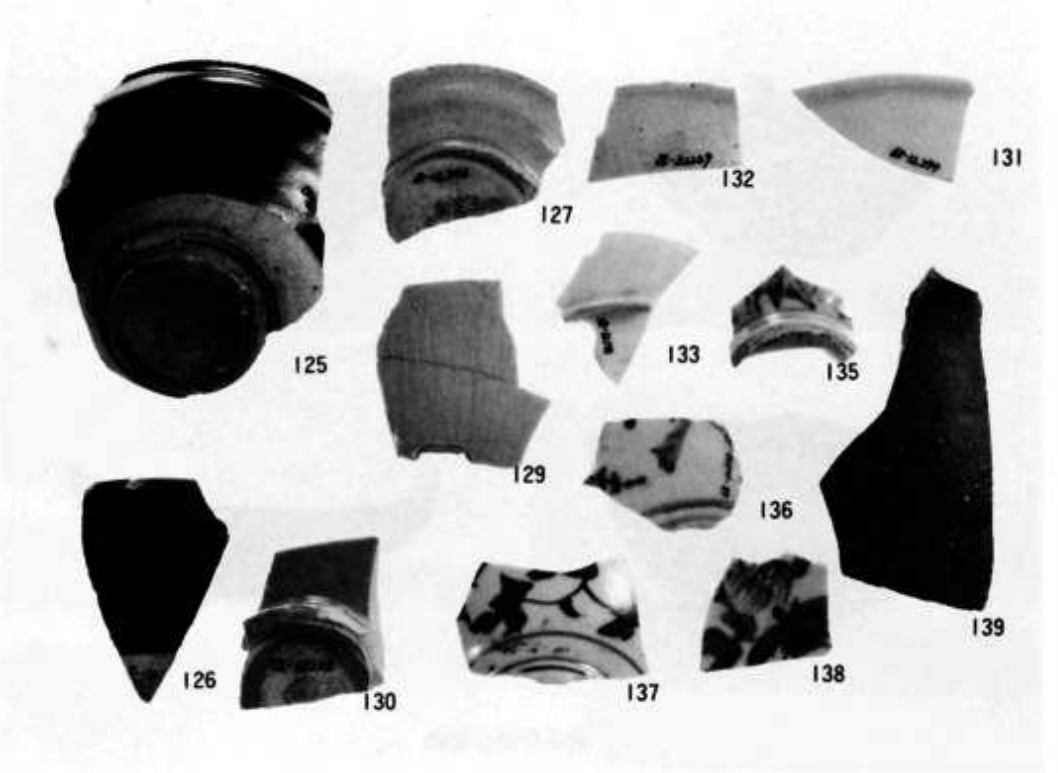
P地区出土遺物　グループ ①



P地区出土遺物　グループ ②



濠SD2261出土遺物



濠SD2261出土遺物

149

150

151

152

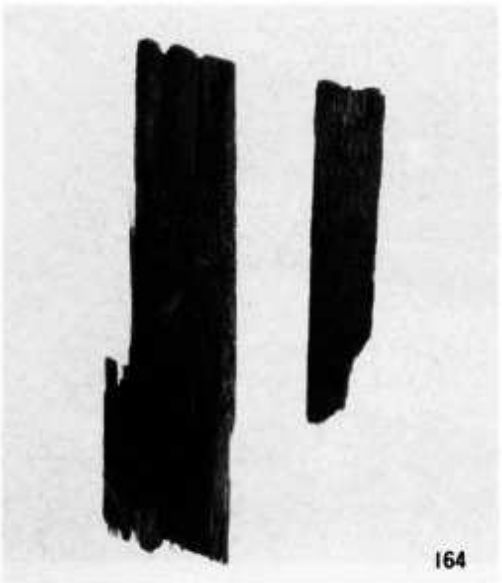
153

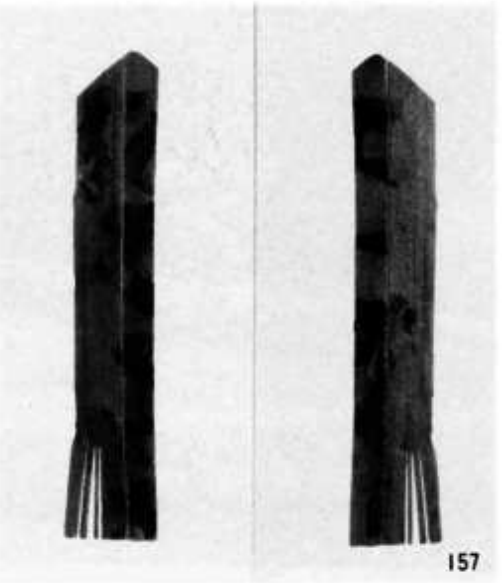
154

155

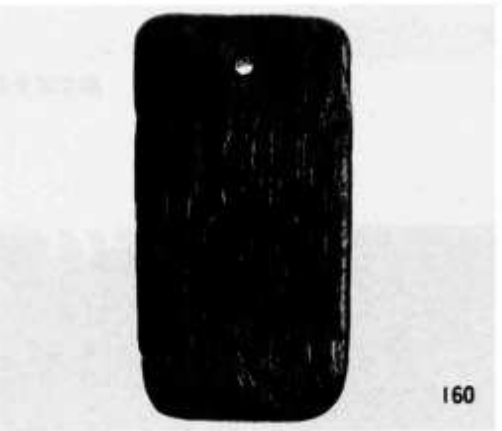
156

濠ＳＤ2261出土遺物


164


157

158

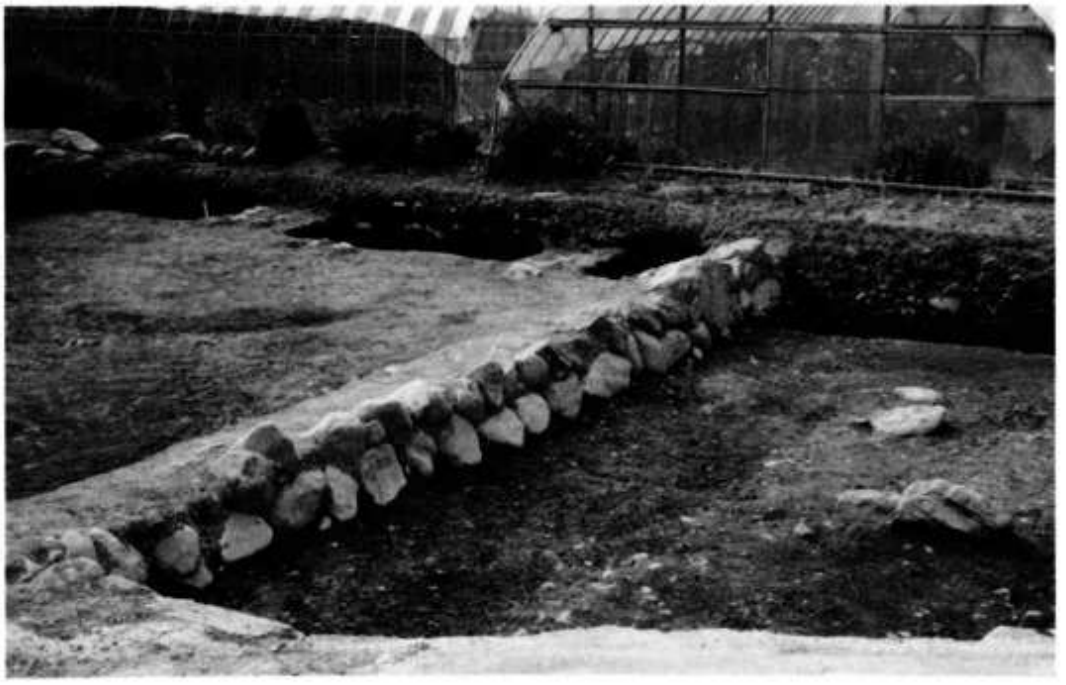

160

163

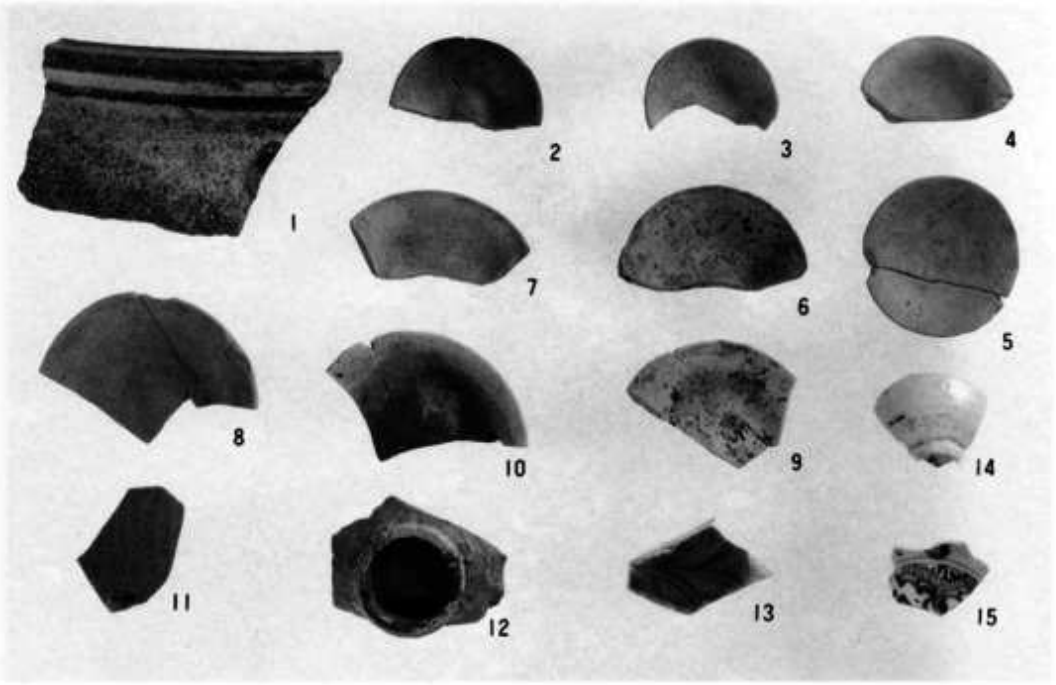
162

濠SD2261出土遺物

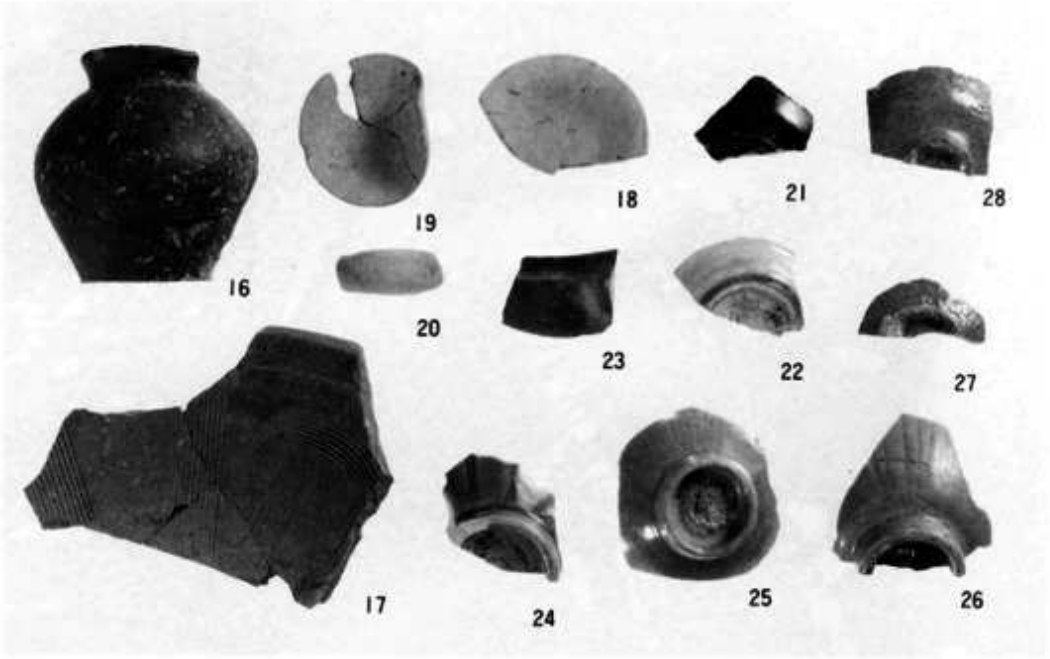
調査区全景　　（東から）



調査区中央部　　（南東から）



1．越前甕　2～10．土師質皿　11・12．青磁碗　13．同盤　14．白磁皿　15．染付皿



16．越前壺　17．同擂鉢　18・19．土師質皿　20．土錘　21．鉄釉皿　23．瓦燈　24～26．青磁碗　27・28．朝鮮皿

調査区全景　（北より）

同　（南より）

1

2

3

5

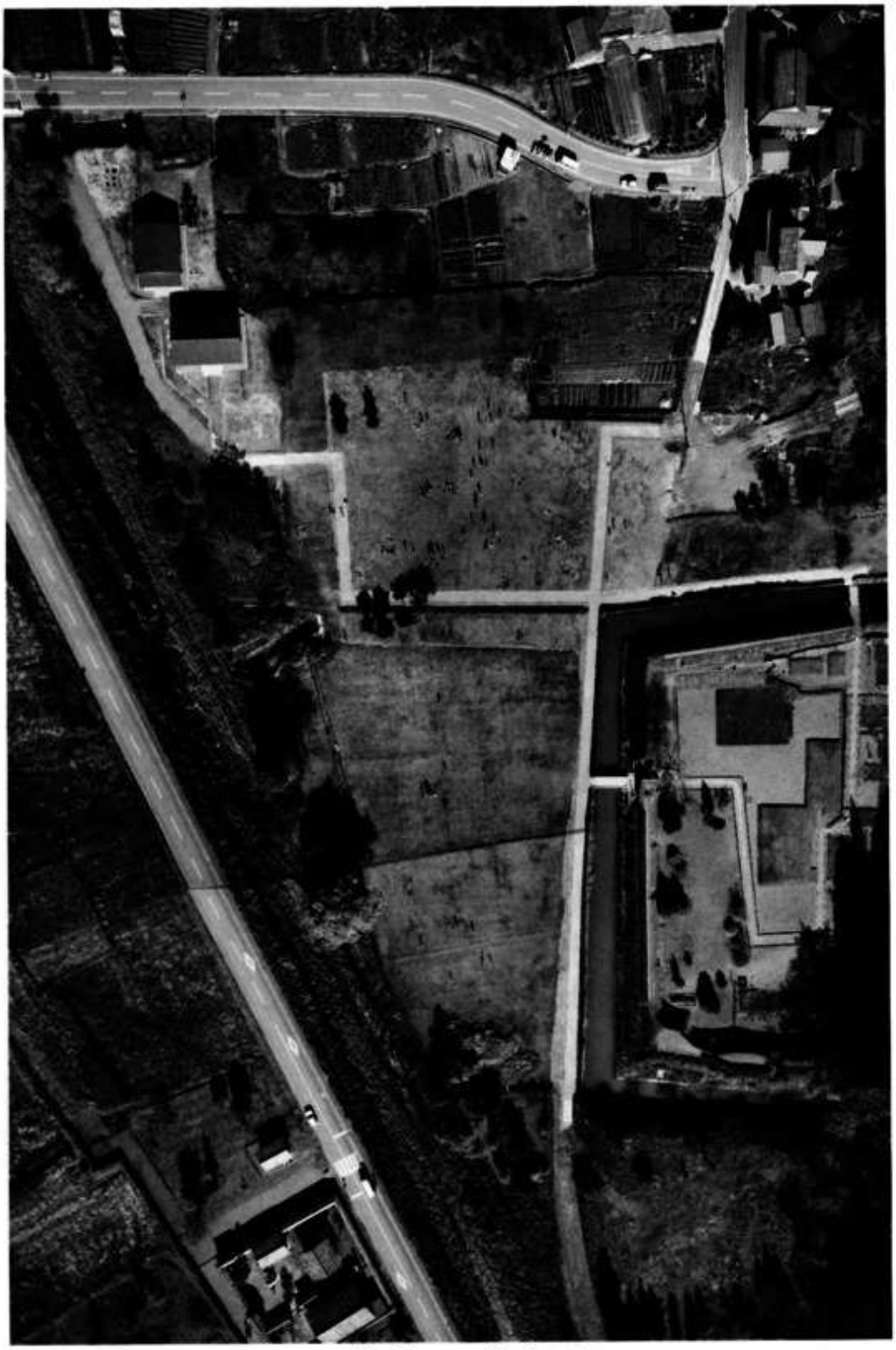
6

全　景　　(南東から)

同　上　　(北から)

仏殿跡　　（南から）

木製説明板



全 景　　(空中から)

全　景　　(北西から)

同　上　　(南から)

園路部　　(南西から)

園路及び排水路　　(西から)

全　景（南西から）

同　上　　（西から）

登り階段　　(西から)

同　上　　(東から)

特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡
平成２年度発掘調査環境整備事業概要(22)

発行年月日　平成３年３月31日
編集・発行　福井県立朝倉氏遺跡資料館©
印　　刷　河和田屋印刷株式会社